

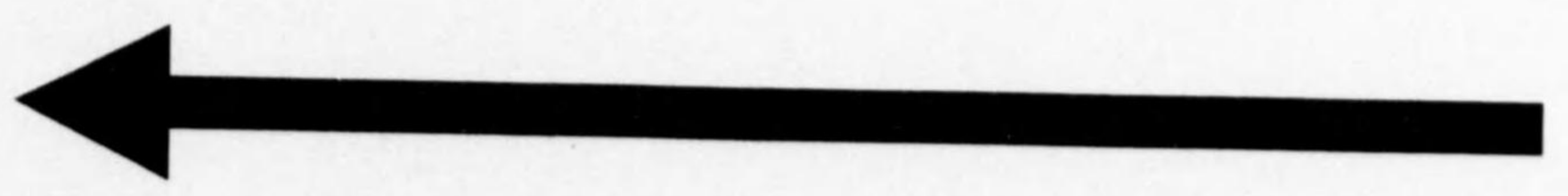
564.9-A42
1200500746790

564.9
442

尼鋼十年史



始



564.9
442

尼鋼十年史



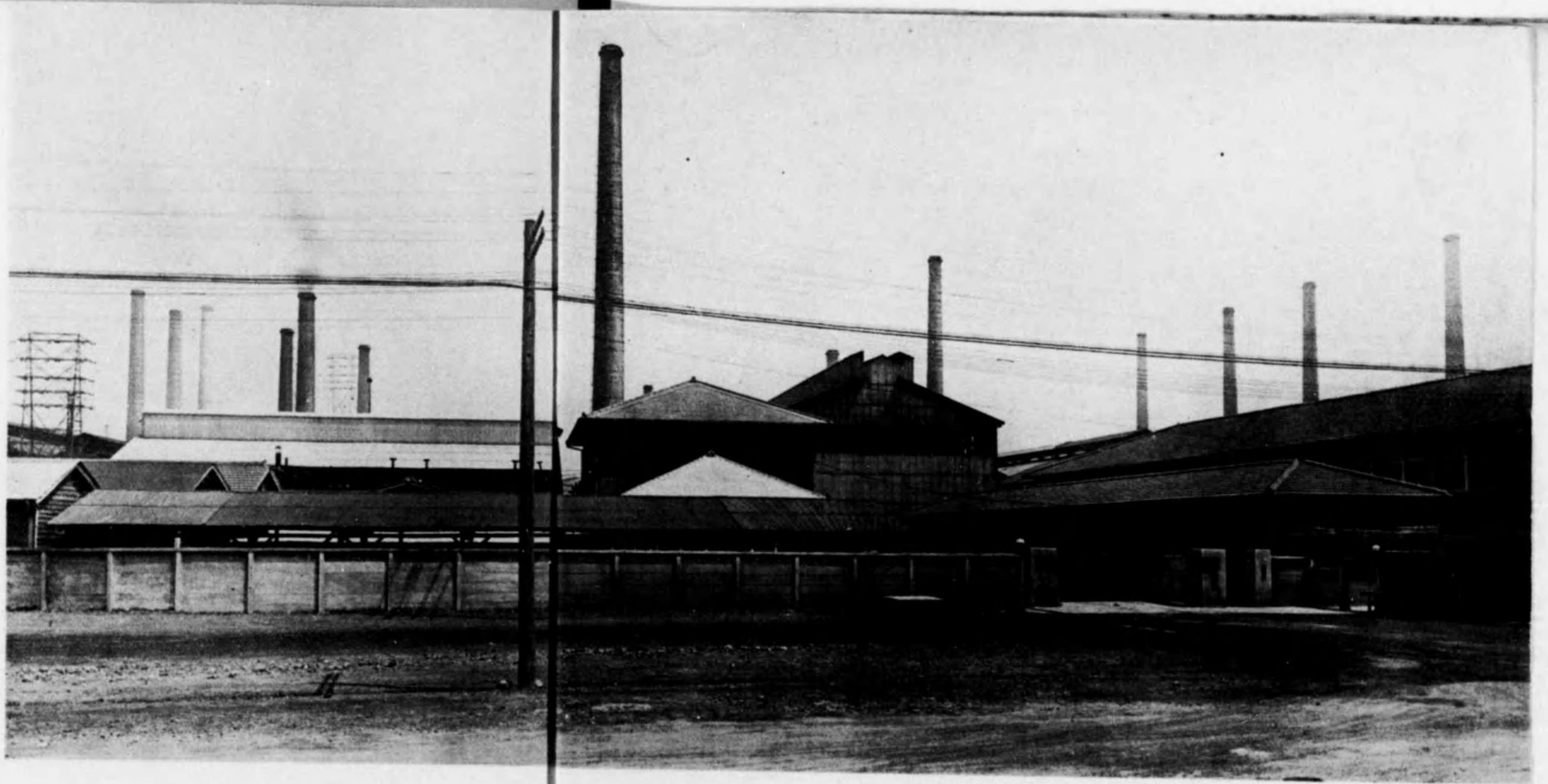
5649
A42

尾鋼十年史





本 社 事 務 所



本 社 工 場



取締役社長 井上長太夫



取締役 飯野 浩次



取締役 井上 好三郎



取締役 千葉 金三郎



取締役 井上 光次



常務取締役 浅野 義夫



常務取締役 平岡 富治



監査役 北島安太郎



監査役 多田甚太郎



取締役 森下彌三八



取締役 楓 英吉



監査役 島田徳太郎



取締役 末兼 要



取締役 久保田権四郎



銅材部長 松 嶋 清



製銅部長 山 田 貞 雄



元取締役 吉 武 徳 三



元取締役 故 風 間 武 三 郎



總務部長 兼 營業部長 千 葉 雄 二



特殊銅部長 兼 研究部長 詩 田 宗 次



顧問 海軍造船中將 正 木 宣 恒

沿
革
篇





序

鐵鋼業が國防上、特に現下の如き大東亞戰完遂の大目的を擔へる我國にとつて、重要な事業なるは余りにも明白たる事實であつて敢て絮説するまでもない。其れは又凡ゆる産業の基礎的資材として必要欠く可からざるものでもある。

自由主義經濟下に於ける斯業は由來浮沈の激しい事業とされてゐる。我國の大製鐵メーカーにしても、その生長の過程に於て幾度か悲境に沈淪し、逆流に遡行するの憂き目を見てゐるのである。今より十年前、斯うした業界の微々たる一細胞として誕生した當社が、短日月の間に着々と其の地歩を固め、良く今日の大を爲

したことは恐らく一つの驚異であらう。然し、それは決して偶然ではなく、井上現社長を初め各重役の完き統卒と全従業員の固き團結が溢る、如き情熱によつて、「強く、正しく、睦じき」社是の下に熔け合つて形成された逞しき推進力の賜でなくて何であらう。

當社全員は過去十年を遡つて創立當初の當社と現在の當社を思ひ合せるとき、今昔の感深く感慨の無量は言を俟たないであらう。然し、過ぎ去つた樂しき苦難の路を追憶して新たなる感激に燃え、光輝ある現在に大なる誇りを覺え、更に課せられたる使命達成に殉國の至誠を以て挺身せねばならぬ。

沿革篇を創業時代、苦闘時代、躍進時代、發展時代に分けたけれど、其の名稱は便宜上冠したものに過ぎず、創業時代は勿論躍進の一途を辿り發展時代にも常に苦闘は續けられたのである。

當社は未だ若い。然し乍ら創立當初と現在とでは時代は已に百八十度の轉換を見てゐる。

若き當社は、逸早く自由主義の古き衣をかなぐり捨てること容易である筈だ。

當社の發展、試練は此れからだご云つてよからう。

一、創業時代

(昭和七年・昭和八年)

我國經濟界は、昭和四年十月以來所謂世界經濟恐慌に襲はれ、昭和五年一月の金解禁に伴ふ緊縮政策に因つて更に不況は深刻の度を加へ、昭和六、七年にかけて空前の混亂状態を呈するに至つた。

鐵鋼界も、矢繼早な鐵鋼價格の崩落に全く施す術もなく、前歐大戦後の飛躍的發展は一轉して整理合同の聲喧しき時代と化して來たが、昭和六年九月の滿洲事變勃發に依り、又は同年十二月の金輸出再禁止に依つて稍好調の波の訪れを思はせらるゝに至つた。我尼崎製鋼所は斯うした情勢のなかに生れ出たのである。

昭和七年三月二十八日當社設立計畫は具體化して、其の結實たる創立總會が大阪市西區薩摩堀の千葉金三郎氏邸に於て開催され現社長井上長太夫氏を筆頭に井上好三郎、千葉金三郎、島田徳太郎、多田甚太郎、高村傳十郎、村上峯男の發起人諸氏會合、定款を可決し、創立に關する経過並びに創立費其他に必要な事項の承認を得、役員の選舉を爲した。



鐵鋼の製造並びに販賣を目的とし、資本金貳拾萬圓を以て、電氣爐と小型壓延機とにより特殊鋼の製造を爲すことになり、四月十一日神戸區裁判所西宮出張所に於て設立登記を完了、茲に株式會社尼崎製鋼所は法的に成立したのである。當時の役員は専務取締役井上長太夫氏、取締役井上好三郎、千葉金三郎氏、監査役島田徳太郎、多田甚太郎氏であつた。

工場敷地を兵庫縣武庫郡大庄村の地先埋立地たる中濱新田に選定、三月三十一日尼崎築港株式會社との間に敷地四千坪に對する土地賃貸借契約を締結、五月四日に莊嚴なる地鎮祭を舉行した。

六月二十七日兵庫縣廳より建築願の許可せらるゝ、や直ちに建設工事に着手十月中旬に竣工を見たのである。建物は五棟にして、延坪九百十七坪、設備並びに監督は高柳宗一氏其の衝に當り、基礎工事は水野組、鐵骨工事は中松組の請負であつた。

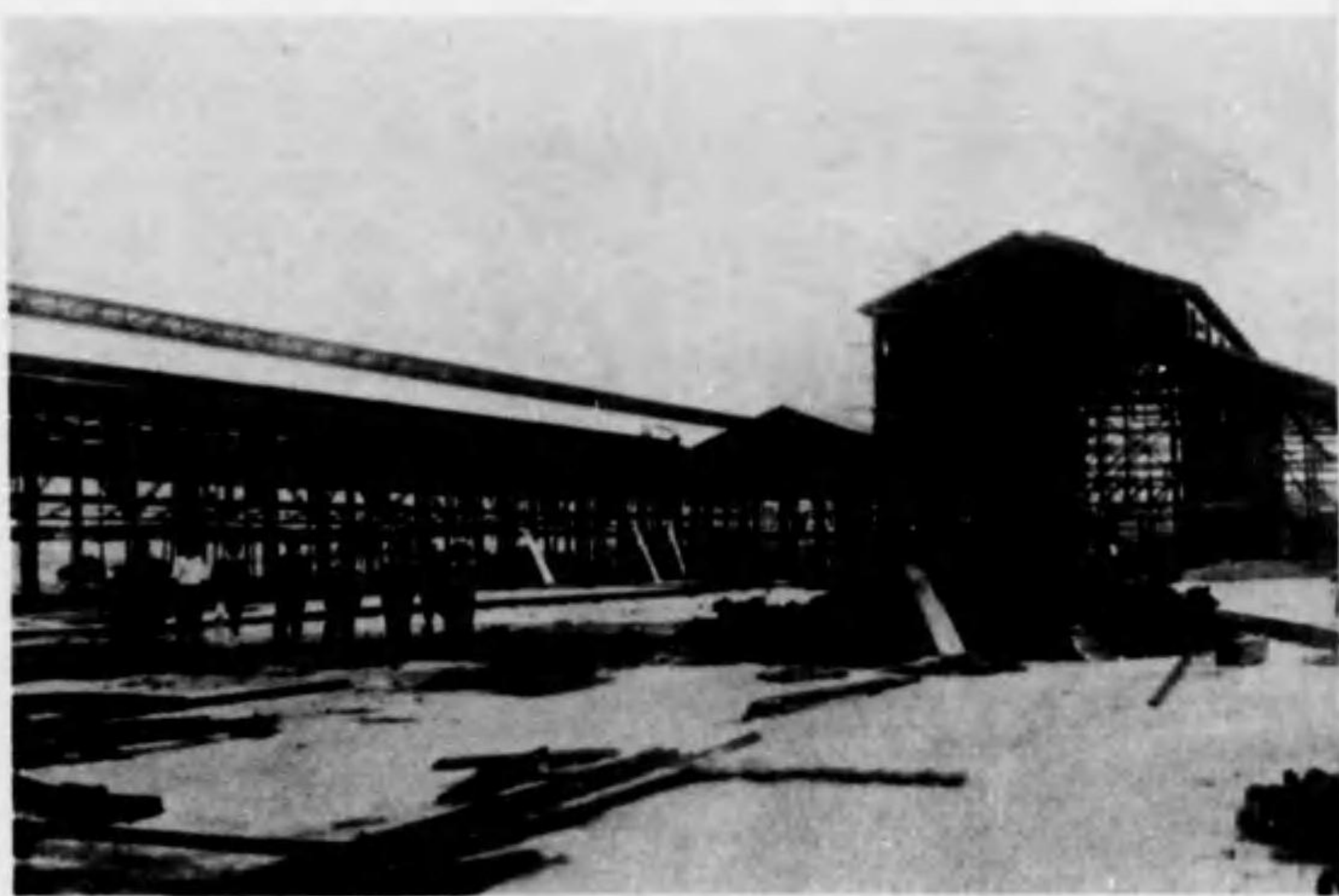
一方、電氣爐關係の工事設備は三菱商事株式會社を通じて牛尾製作所に依頼、壓延機械其他の諸設備は當時東京シャリング株式會社の工場長たりし平岡現常務の考案監督に依り夫々一流の専門業者に發註することになつた。

當時、中濱附近は現在の如き工場地帯ではなく、寥々たる埋立

地に過ぎなかつた。竣工を見るまでは、井上専務の統率の下に全従業員一丸となつて生みの喜悦に浸りながら、唯孜々として働いたのである。この汗と油とは今尙當社の基礎に搖ぎなき力を與へて居る。

十一月二十九日商工省より製鐵業獎勵法適用の件認可せられ、十二月八日遂に待望の電氣爐に火が入り、越えて昭和八年一月十七日に小形壓延工場の始業式を舉行同時に平岡富治氏工場長として就任、二十日には盛大なる開業式を開催した。

開業の歡喜に燃え立つて居る當社にとつて、幸運にも業界は漸次好況に向ひつゝあつたが、新らしく生れた小會社の行路は容易ではなく二月に入りて製品の販賣を開始するに至つたものゝ、他の大會社との競合、建設とは異つた面に困難は待つて居た。更に、運轉資金の缺乏は増資の止むなきに立至り、一月十一日の臨時株主總會に於て拾萬圓の第一回増資を可決した。然し、強烈なる意力は遂に販路の確



保を齎し臨時總會に於ける淺野義夫氏の取締役就任は社礎に一層の重きを加へ昭和八年三月末の決算に於て貳拾五萬圓の賣上をなし壹萬五百五拾壹圓貳拾五錢の利益金を計上することが出来た。

一休みの暇もなく、好況を示しつゝあつた業界は又しても反落の色を現し、四月以降鋼材市況は低下の一路を辿り、八月には丸鋼八拾參圓の賣出を余儀なくさるゝことになつた。高値より貳拾圓方の引下げである。斯うした悪條件に崇られた期間にあつて尙悠々年一割の配當を爲し得たのは、外に市況との惡戦、内に生産費切下げの苦闘が如何に激烈であつたかを如實に物語つてゐる。

積極的に普通鋼材への進出を計るべく、平爐及び中大形壓延工場の建設計畫、並びに鍛鋼工場の建設計畫は、昭和八年十一月七日開催の第三回定時株主總會に於て資本金を一躍倍額の六拾萬圓に爲すべき第二回増資の可決となつた。十二月十六日新設平爐工場の地鎮祭を舉行、鍛鋼工場も建設工事に入つた。市況は平穩なる中にも一般事業界の活況を反映して、製品の賣行は次第に好轉しつゝあつた。

二、苦闘時代

(昭和九年・昭和十年)

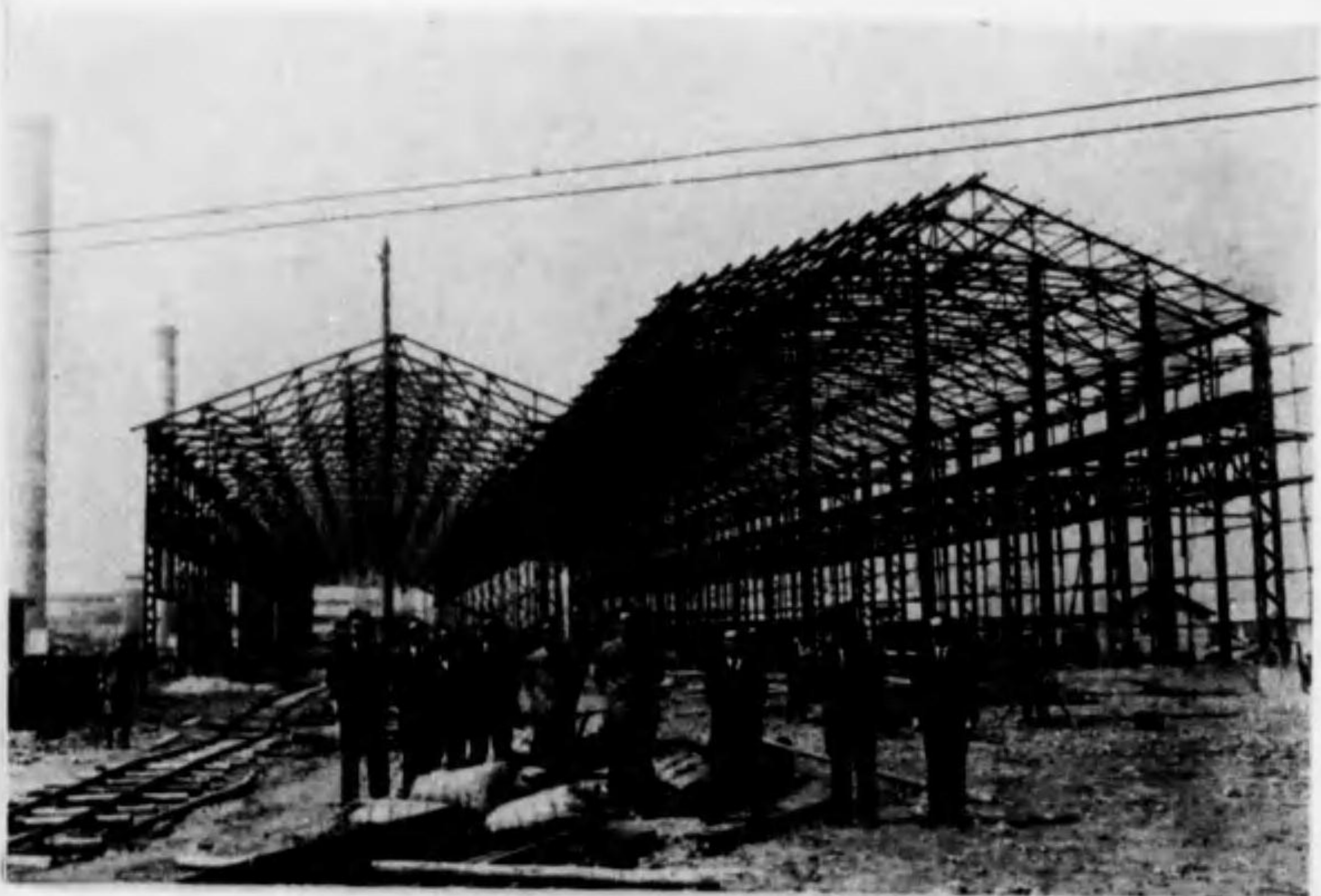
昭和九年の春を迎ふるに至つて、業界は軍需工業方面の消費増大と滿洲國開發に伴ふ新需要の擡頭に因り、活況を呈することとなり、市價も又昂騰に昂騰を重ねるに至つた。然し乍ら、當社の主製品たる丸鋼のみは無理解な市價抑壓策に制約せられ、他品種の値上りを傍觀しつゝ、割安商談を余儀なくされたが、好況の余影を受けて製品の賣行きは極めて良好であつた。

四月十二日開催の第四回定時株主總會に於て、第三回増資を可決、資本金は百五拾萬圓になり、更に七月十八日開催の臨時株主總會に於て、増資新株を舊株壹株に對し新株壹株を以て割當を爲したる殘株六千株の處分に付附議したる結果、壹株に付七圓五拾錢のプレミアアムを附し、四千株は株式會社淺野小倉製鋼所に貳千株は井上光次氏に割當ることに決し、同時に淺野小倉製鋼所の専務取締役にして當社の相談役たりし末兼要氏及び井上光次氏の取締役就任を見ることになつた。

四月五日及び六月三十日と二回に亘り、尼崎築港株式會社より夫々壹萬五百六拾九坪、參千九百貳拾五坪の工場敷地を買收し、前年末より建設工事に着手した平爐工場は、豫定より稍遅れたけれども、七月三日に第一號爐の火入式を舉行、七月二十六日午後一時に初出鋼を見更に八月二十四日に第二號爐の火入式、九月七日午前十時初出鋼を爲すに至り、鍛鋼工場も八月四日より操業を開始した。

茲に於て、従業員一同は陣容の整備に衝天の意氣を抱き躍進の第一歩を踏み出さんとしたる折柄九月二十一日午前七時關西地方一帯に未曾有の暴風雨が襲來、當社工場も高潮の爲浸水五尺余りに達し、遂に作業休止の止むなきに立至つたのである。

余りにも突然に襲ひ來つた此の自然の猛威の前に、天災とは云へ當社全員は痛烈なる失意の苦杯を喫したのである。然し、事態は暫時の袖手傍觀をも許されない。従業員中一名の重傷者をも出さなかつたことを不幸中の幸として、災害の當日よ



り復舊に忙殺されることになつたが、全員復舊に努力せる甲斐あつて、先づ十月七日電氣爐工場の作業復舊を初めとして、十日には平爐工場、引續き小形壓延工場の操業を見ることになつた。蒙つた打撃は大きかつたけれど、大自然が當社の爲めに課した試練の尊さは逸すべきではない。

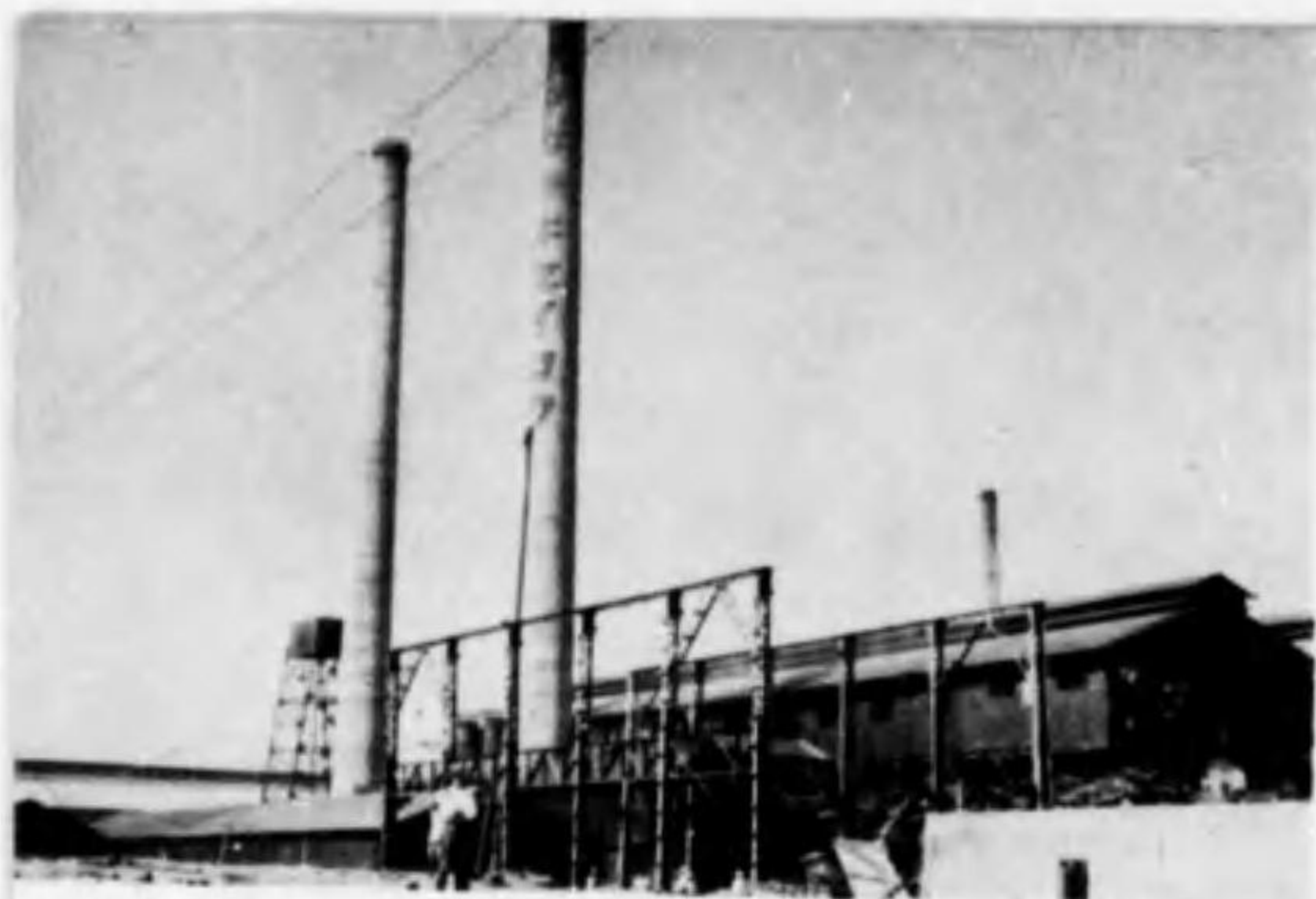
十一月十八日、中大形工場はその優秀設備を誇りつゝ、試運転を舉行し、全工場の作業復舊と相俟つて、愈々完璧の布陣の下に風水害復舊工事を目當の市價暴騰の波に乗り出さんとしたのであるが、市場は又もや反落の色濃く沈んで行つた。即ち、一方には鐵鋼關稅半減問題の議會に提案せらるゝあり、他方には歐洲金ブロック崩潰の懸念せらるゝあり、此等の影響を受けた業界は又必然的に不振の一路を辿らねばならぬことになつた。

昭和十年に入りても尙不振の色は去らず、インフレ景氣を見越しての生産力の擴張も需要の伴はざる生産の増大により供給過剰を現出せる上に、徹底的な生産統制は斷行せられず益々落潮に陥つて來たが斯うした情勢に對處すべく當社はコストの引下げに全力を傾注し、技術方面の強化を計る可く、四月二十五日開催の第六回定時株主總會に於て、建設當初より工場長として盡力された

平岡富治氏の取締役就任を見た。市況は七月に至り遂に丸鋼七拾圓台に暴落し、近來稀有な安値に業界も亦呻吟することになつたが、八月に入るに及んで夏期の自然減産と市場在庫品の減少に依り稍恢復の微候が見られた折柄、伊エ紛争不可避の報は解體船の入手難に依り伸鐵物の暴騰を招來し、實需の買逸りに値段の引上を見るに至りたるも、それは東の間の刺戟劑に過ぎず市場は又沈滞の色を漲らせて來た。然し、斯かる沈滞の空氣中にも陽氣は徐々に芽生へつゝあつた。國際情勢の微妙なる動きは各國をして軍備擴張の必要を痛感せしめ、その影響は各國製鋼作業率の上昇となつて現はれ初めて來たのである。

秋深き十月二十一日に當社守護神たる成光稻荷大明神の鎮座祭を舉行した。

此の二ヶ年間は當社にとつて洵に多事多難な年であつたが、諸種の難關に善處せんがための苦闘は内面的に各工場の整美、製品の質的向上技術の進歩、コストの低下等の收穫を齎し、何ものにも負けざる不退轉の底力を與へられ、一面非常に意義深き年であつた。



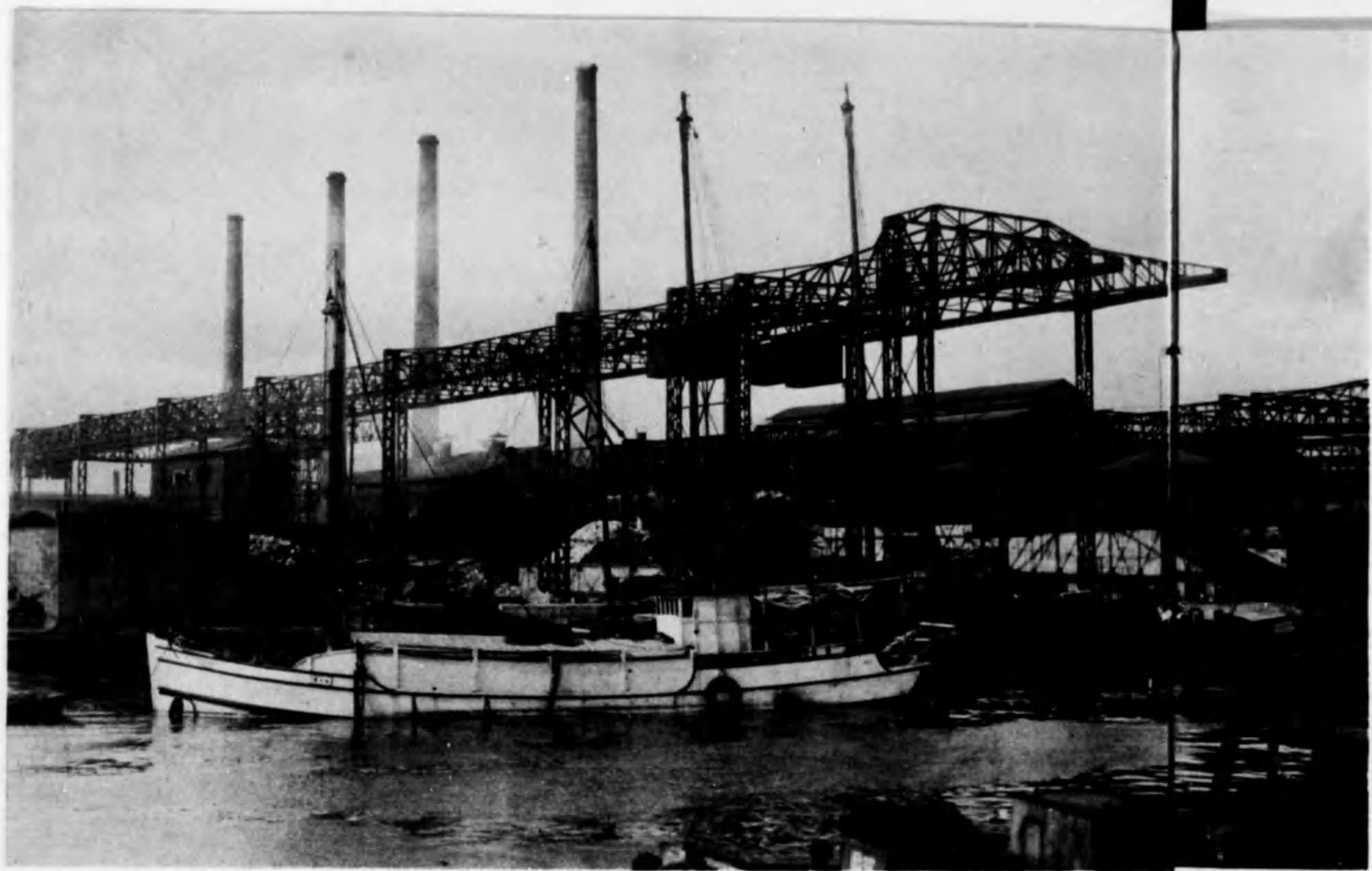
三、躍進時代

(昭和十一年・昭和十二年・昭和十三年)

前年末より不味閑散の市況は続き、原料高製品安の情勢も又依然たる中に當社首脳部は早くも底流の何ものなるかを見極め、當社躍進時代の端緒を開いたのである。即ち昭和十一年五月二十一日の第八回定時株主總會に於て鋼管工場の新設及び平爐の増設計畫に對し資本金を參百萬圓に倍額増資することになった。第四回増資である。次いで七月二十三日の臨時株主總會に於て、久保田權四郎氏の取締役就任を見た。

井上専務は鋼管工場建設を具體化す可く、又製鐵事情視察の爲七月四日渡歐の途に就いた。七月三十日には平爐増設の件、九月二十二日には鋼管工場新設の件夫々兵庫縣廳より認可を得るに至つた。

爽涼の秋となるに及んで
需要擡頭と在庫減少に加ふ
るに屑鐵の高値は鐵鋼饑饉



時代を現出、内には未曾有の尤大豫算の議會通過あり此れに伴ふ生産設備の擴大造船界の股盛は鋼材需要の激増を來し、更に大なる鐵鋼増産計畫の確立が叫ばれるに至り、外には歐洲各國の政情不安によりて國際間の軋轢又益々激化、軍擴熱は銑鐵屑鐵の買付に狂奔するの結果を導き出し此れによる品不足は價格の暴騰となるに至り、遂に世界的鐵鋼ブームの現出となつた。製品市場も前大戰以來の新高値を呼び、實に丸鋼貳百圓の關門を突破するに至つた。



昭和十一年九月決算に於ては、第三期以來持續し來れる一割配當に更に一割の特別配當を爲し、十一月十二日井上專務の歸朝を見るに及んで尼崎築港株式会社より買収せる中西ノ切六四番地に建設工事中の鋼管工場は愈々進捗を見、越えて昭和十二年三月五日には第三號平爐の火入式を舉行、二十二日に初出鋼を見、五月三日に第四號爐の火入式、五月十三日に初出鋼を見るに至つた。

俄然、昭和十二年七月七日今次大東亞戰爭の遠因たる支那事變は蘆溝橋一發の砲聲により勃發、暴支膺懲の幕は遂に切つて落されたが、此れにより鐵鋼の需要は増大に増大を重ねるに至りたるも需給の不均衡は依然として續き、政府の鐵鋼國策又準戰時計畫より戰時計畫へ編成替されたのである。即ち昭和十二年八月十二日製鐵事業法が斯業の包括的法規として發令され、從來の自由主義的生産乃至カルテル的統制から軍事的意義に於ける國家的統制へ移行し、十月二十二日多年懸案の生産、輸出入、配給、消費等に關する自治的統制機關たる日本鐵鋼販賣聯合會（昭和十三年三月日本鋼材聯合會と改稱）が組織され、其の統轄下に各種共同販賣組合が結成せらるゝに及び、當社も之れが一員として參加、協調に盡すことゝなつた。



昭和十二年は恰も創立五週年の意義深き年に當り、好況の中に社礎の確立を計り、五月二十五日開催の第十回定時株主總會に於て専務取締役井上長太夫氏は取締役社長に、取締役淺野義夫氏は常務取締役任に、夫々就任することになり、資本金七百五十萬圓への第五回増資を可決し、更に十月二十八日開催の臨時株主總會に於て、増資額四百五十萬圓の株式九萬株の内六萬株は舊株壹株に付新株壹株を割當て、壹萬株は縁故關係及び會社功勞者に割當て、貳萬株は壹株に貳拾貳圓五拾錢の額面超過金を附して一般に公開することになった。

九月決算に於て、資本金參百萬圓に對し貳百六拾萬圓に達せんとする驚異的純益金を上げ一割の普通配當に四割の特別記念配當を爲した當社の株式公開は沸然として市場の人氣を煽り、公開前の株主四十七名に比し實に五百九十五名の株主の増加を來し、所期以上の目的は達せられたのである。

一方鋼管工場の建設は豫定の如く順調に進捗し、九月三日に試業式を舉行、十一月よりは其の特色ある製品が續々と江湖の絶大なる期待の内に生産せらるゝに至つた。更に將來に於ける銑鋼一貫作業の基礎を築く可く熔鑄爐の建設を企圖し、昭和十二年八月に株式會社久保田鐵工所と折半出資の下に資本金五百萬圓の尼崎製鐵株式會社を創立するに至つた。

昭和十三年に入るに及んで支那事變も長期戦に移行の情勢顯著にして、我國經濟機構の上にも此れに對處すべき劃期的なる大變革が齎され、主要物資は國策遂行の線に沿ふて統制の實施を見るに至り、鐵鋼部門に於ても一般不急の民需に對しては可及的には抑壓し時局關係の緊急品若くは輸出品に重點を置き生産配給を行ふ事となり、七月一日切符制度の發令により統制は更に一段と強化さるゝに至りたるが、原料需給に於ても不圓滑なるを免れず革新時代に伴ふ過渡的現象を示して來た。

事變勃發以來、當社は多數の應召將兵を送り、手不足は原料燃料等の入手難と共に漸く眼に立ち始めて來た。然し乍ら、鴻業達成の爲銑後産業人としての責務を全ふすべく、あらゆる障害を排除し敢然として生産の増強に力を盡したのである。

四、發展時代

昭和十四年
昭和十五年
昭和十六年

支那事變の進展は東亞新秩序の建設にまで發展し大陸經營に伴ふ鐵鋼の需要は増大、各社競つて生産の擴充に狂奔せるも要求に應ずる能はず、需給の不均衡は益々甚しき状態に立至るに及んで、當局に於ては消費の抑壓に力を注ぐと共に反面適正價格の維持に萬全を期し、鋼材聯合會又此れに呼應して共販機構を強化、一層配給の合理化を計り、併せて輸出振興に便ならしむべく國家的使命を帯びたる日本鋼材販賣株式會社を昭和十四年四月に創立、當社も之れが一員に参加することになり中央に於ける地位も自ら重きを爲すに至つたが、新らしき歴史にも拘らず斯る地位を獲得し得たのは一に指導者の卓



識、名聲と従業員一同の努力の賜である。

昭和十四年二月一日特殊鋼の増産を計るべく増設中の電氣爐完成、操業を開始し、四月二十二日の第十四回定時株主總會に於て取締役平岡富治氏常務取締役に就任した。

當社の機械工業方面への進出計畫は遂に昭和十四年五月三十日豫てより當社と密接なる取引關係にあつた神戸市葺合區吾妻通所在株式會社高尾鐵工所の懇請黙し難く同社を買収するに至つた。同社は當時資本金參拾萬圓にして、諸機械製作を主たる目的とする會社であつた。

屢々議に上りながらも實現を見るに至らなかつた隣接大阪製鉄株式會社との合併問題も、機熟して七月二十日開催の臨時株主總會に之れを附議、六月二十四日附締結せる合併假契約書を全面的に承認、直ちに主務官廳に合併の申請書を提出し十一月三十日附を以て商工大臣の認可



を得十二月一日を期して實行に移つたのである。此の日に先だつ十月十四日新築中であつた事務所の竣成を見、新生尼鋼の従業員一同は和氣満々の内にこの新事務所を中心に働くことゝなつたのである。

合併の結果當社は資本金四百五十萬圓を増加して壹千貳百萬圓となり、之れに依り發行する新株式は合併實行の日に於ける製鉄側株主に對し其の株式拾株に付當社株式九株を以て割當交付することになつた。工場關係に於ては新に平爐、中厚鉄、薄鉄、中形工場及びシャリング工場を加へ、役員は取締役役に風間武三郎、楓英吉、森下彌三八の三氏を、監査役に北島安太郎氏を加へることになつた。

昭和十四年の夏は渇水と石炭不足に因る電力制限の爲作業上諸種の點に於て豫期せざりし支障を招來したのであるが、銳意作業能率の増進と合理化とに力を注ぎ此れが克服に全力を盡したのである。

昭和十五年に入るに及んで、中央との折衝一層緊密なるを要するに至り東京市麴町區丸の内二丁目九ビル六二九號室に東京出張所を開設することになり、二月一日業務開始の運びになつた。一

方十三年五月に着工したる壓鍊工場も三月十二日竣工し特殊鋼鍛造部門に一段の強靱性を加へることになつた。

輸出方面への進出を企圖せる當社は、薄鉄製品の効果的使用をも考慮し、昭和十五年四月三十日大阪市西淀川區佃町所在、珉郎鐵器の製造販賣を目的とせる資本金五十萬圓の大阪珉郎株式會社を傘下に收めるに至つた。

昭和十五年五月三十一日當社取締役風間武三郎氏突如逝去され翌六月一日葬式が営まれた。

當社營業部門よりシャヤ業の分離の止むなき狀勢に立至るに及び、昭和十五年七月一日を期し、大阪市此花區北安治川通なる當社切斷部を獨立せしめ大阪シャヤリング株式會社を資本金五十萬圓を以て創立する事になつた。

昭和十五年八月壹日時局に對する産業戦線の強き團結を目指して起りたる産業報國運動に邁進すべく、尼鋼産業報國會の結成式を舉行した。

勞務者の需要刻々増大する



反面、住宅並びに宿舍難は又一段と激しくなり、厚生省に於ても之れが設置を懇請せられ、當社も従前よりその必要性を痛感し居たるに依り早速勞務者住宅及共同宿舍の新設を計畫し、昭和十五年二月十日に勞務者住宅、全年二月二十三日に勞務者共同宿舍新設の件臨時資金調整法により許可を得十二月七日には盛大なる竣成式を舉行するに至つた。

兵庫縣武庫郡鳴尾村小松字霞開なる勞務者住宅は「尼鋼の里」と命名、武庫郡大庄村濱田字崇徳院なる勞務者共同宿舍は「尼鋼の寮」と命名した。

國際情勢は愈々險惡なる雲行きとなり、昭和十五年九月二十七日の日、獨、伊三國同盟成立の新情勢に對し、十月十五日米國は遂に屑鐵の輸出禁止を敢行するに至つたが、斯くある可きを豫想して計畫された東亞共榮圏内に於ける自主的鐵鋼國策は益々強化さるゝこととなつた。當社が尼崎製鐵と連繫しての鐵鋼一貫作業は其の必要性益々重要な度を加へたるを以て昭和十五年十月二十九日開催の第十七回定時株主總會に於て十月二十八日附を以て許可を得たる豫備精鍊爐の設置に要する爲資本金を壹千八百萬圓に増額すべき第七回増資を斷行することに決し、取締役風間武三郎

氏逝去されしにより補欠選舉の結果吉武徳三氏就任する事になつた。

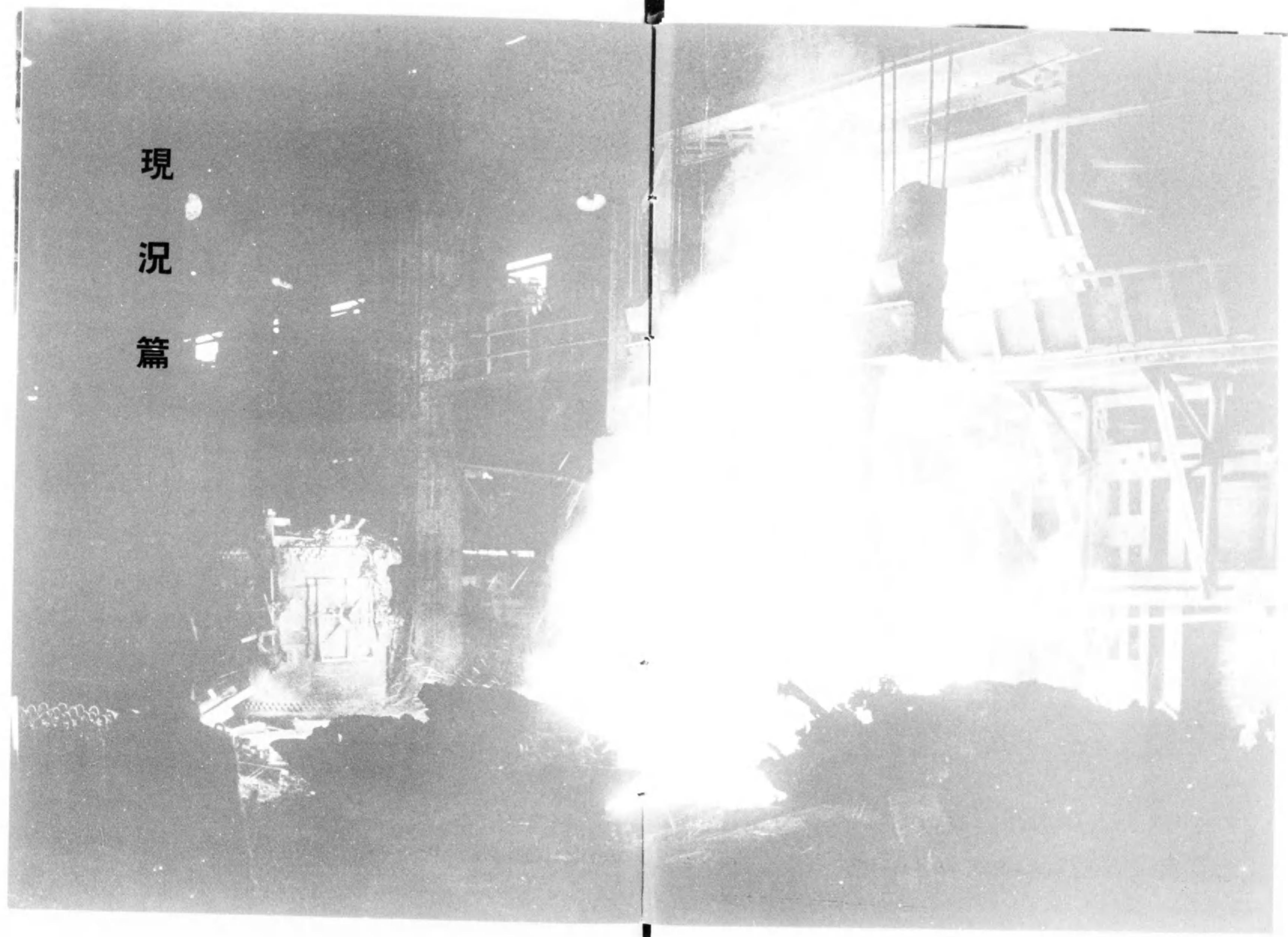
昭和十五年十二月二日、當社株式は其の市場性を充分認めらるることになり、大阪株式取引所長期清算市場に上場さるゝに至つた。

斯く着々として發展の地歩を踏みしめて來た當社は昭和十六年に於ては已に重點會社の一として業界にその名を轟はるゝこととなり、六月七日には待望の尼崎製鐵熔鑄爐火入式が舉行されその順調なる出銑狀況は當社に於ける豫備精鍊爐の工事進捗と共に將來の發展を裏書するかの如くである。

昭和十四年以來、特殊鋼部長兼研究部長蒔田工學博士の研究によつて完成された浪速鋼は當社獨特の製品として軍御當局の御認識を得、需要は日を追ふて増大、創立當初の目的もこゝに實を結ぶことになつた。

昭和十五年四月より正木海軍造船中將を顧問として迎へたる當社は軍方面に對する完璧なる製品の作製に全力を傾くるの体制を漸次整備するに至つたが、折柄昭和十六年十二月八日大東亞戰の勃發となつたのである。

現
況
篇





一、社況概観

創立滿十周年を目前に控へた昭和十七年三月に於ける當社の状況を瞥見して見やう。滿洲事變、日支事變、大東亞戦争を戦ひ同時に大東亞共榮圏の確立に肇國以來の大事業を遂行しつゝ、ある我大日本帝國の現在に於て鐵鋼の必要欠くべからざるは論を俟たない。「近代戦は鐵と鐵との戦ひである」と云はれてゐる。従つて現に我尼崎製鋼所が果しつゝ、ある國家的役割は實に重且大である

大阪製鉄を合併して以來我鐵鋼界に於ける生産高は五大メーカーの圏内に入り、他面には尼崎製鐵株式会社に出資して其の溶銑を當社へ輸送し來り一貫作業たるしむべく目下着々工事進捗中の豫備精鍊爐の完成を急いで居る、之が稼働の曉に於ては當社の業界に於ける地位は牢固として抜くべからざるものとなるであらう量的のみならず質的にも壓延鋼材と鍛造品とを併せ生産し、特殊鋼部内に在つては特に研究部長兼特殊鋼部長である蒔田工學博士の發明にかゝる浪速鋼を有する事はこれ又特筆大書すべき強味であつて、時局下軍部並びに各方面への貢献は實に目覚めざましいものがある。

又大東亞戦争完遂の爲必要缺くべからざるものとして朝野を擧げてその擴充を叫ばれてゐる船舶の建造には鐵鋼の必要不可欠なる事は勿論であるが、當社は從來造船用鋼材の製作にひそかに並々ならぬ努力と研究とを拂つて來たのであつて今般新しく時局の脚光を浴び海軍御當局并に鐵鋼統制會の懇意を受け多量の造船用鋼材を製作する事となり時局産業として國家への奉仕に一段その威力を發揮する事が出来る事になつてゐる。

鐵鋼界の現状は材料難、燃料難、輸送難、勞力不足及び各種資



材の品質低下等の連続であり「苦」の集結であるが、吾々は帝國の現在と將來とに思を致し大戦争完勝并に大東亞共榮圈の確立戦に必勝計畫を遂行せんが爲此の危機と苦難とを突破すべく鋭意研究と努力を以て業務に精進せむことを誓ふ次第である。

一、重 役

現在の役員は次の通りである。

取締役社長	井上長太夫	取締役	楓 英 吉
常務取締役	浅野 義 夫	取締役	久保田權四郎
常務取締役	平 岡 富 治	取締役	森 下 彌 三 八
取締役	井上好三郎	取締役	末 兼 要
取締役	井上光次	監査役	多田甚太郎
取締役	飯野浩次	監査役	北島安太郎
取締役	千葉金三郎	監査役	島田徳太郎

三、顧問

海軍造船中將 正木 宣 恒

四、部 長

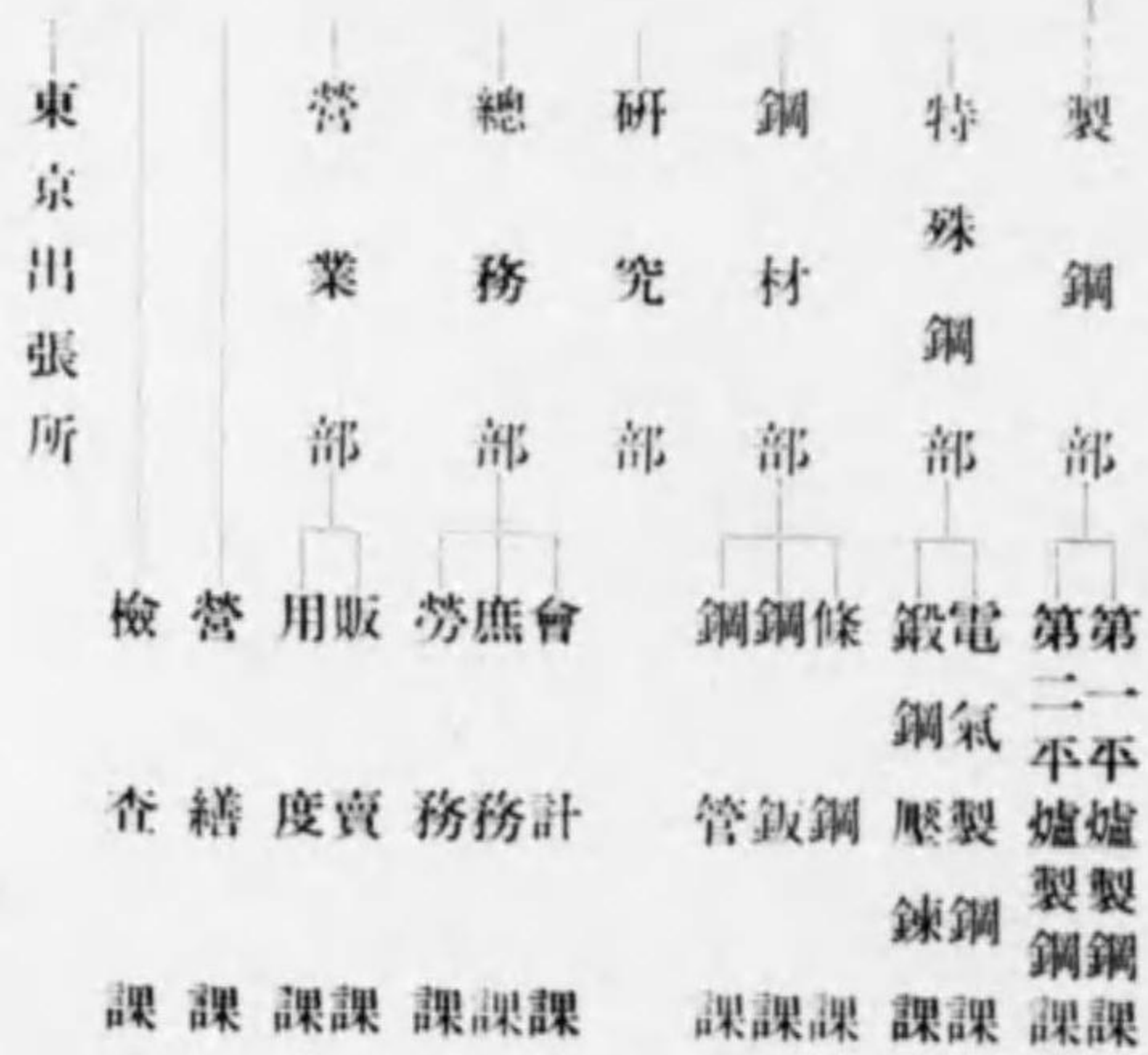
製鋼部長 山 田 貞 雄
鋼材部長 松 嶋 清

特殊鋼部長 兼 研究部長 蒔 田 宗 次
總務部長 兼 營業部長 千 葉 雄 二

五、組 織

社長 秘書

常務取締役





六工場及製品

(1) 工場設備の概要

一、製鋼設備

- シームレス式平爐 ○基
- 豫備精錬爐 ○基
- エルー式電気爐 ○基

二、鋼材製造設備

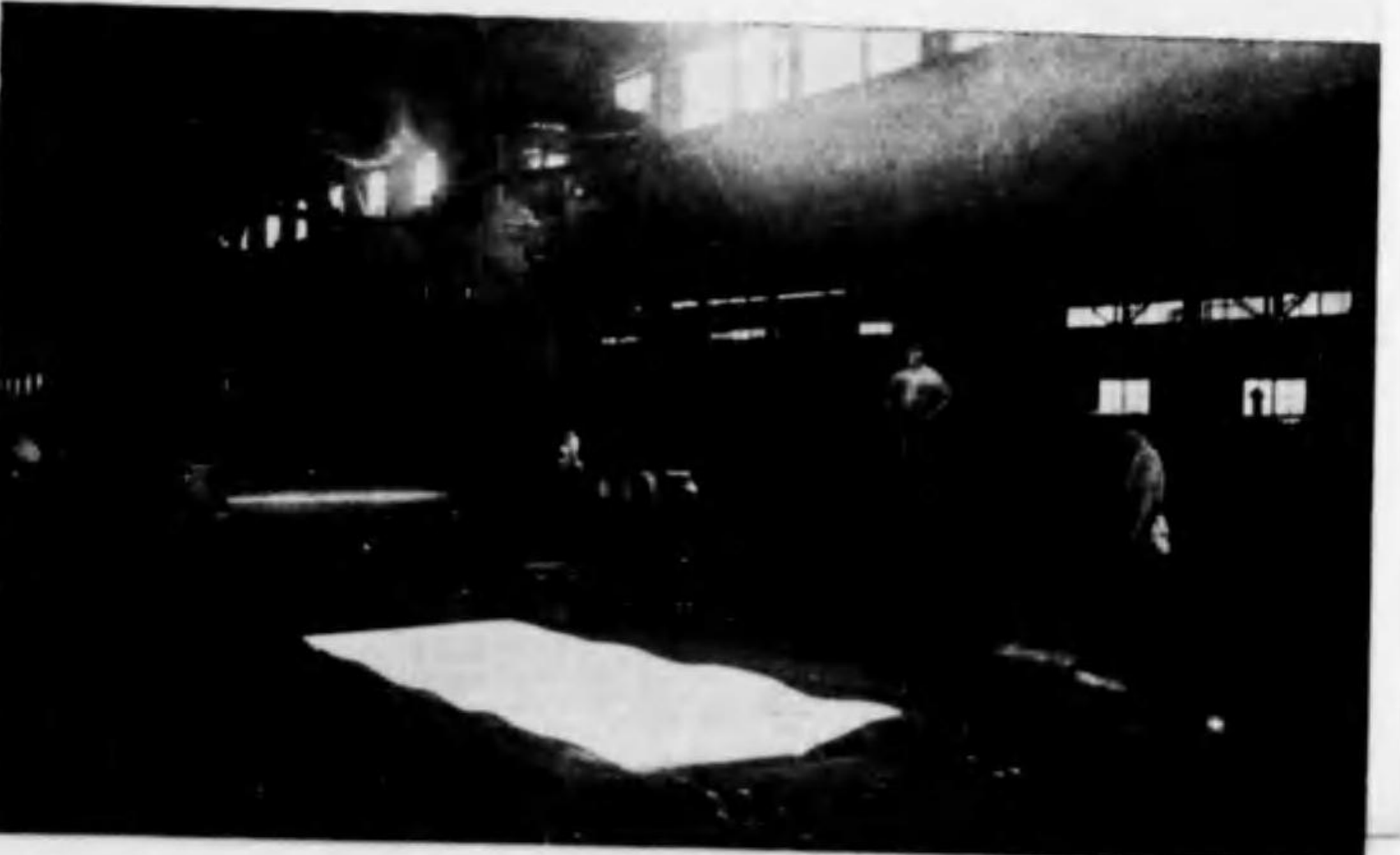
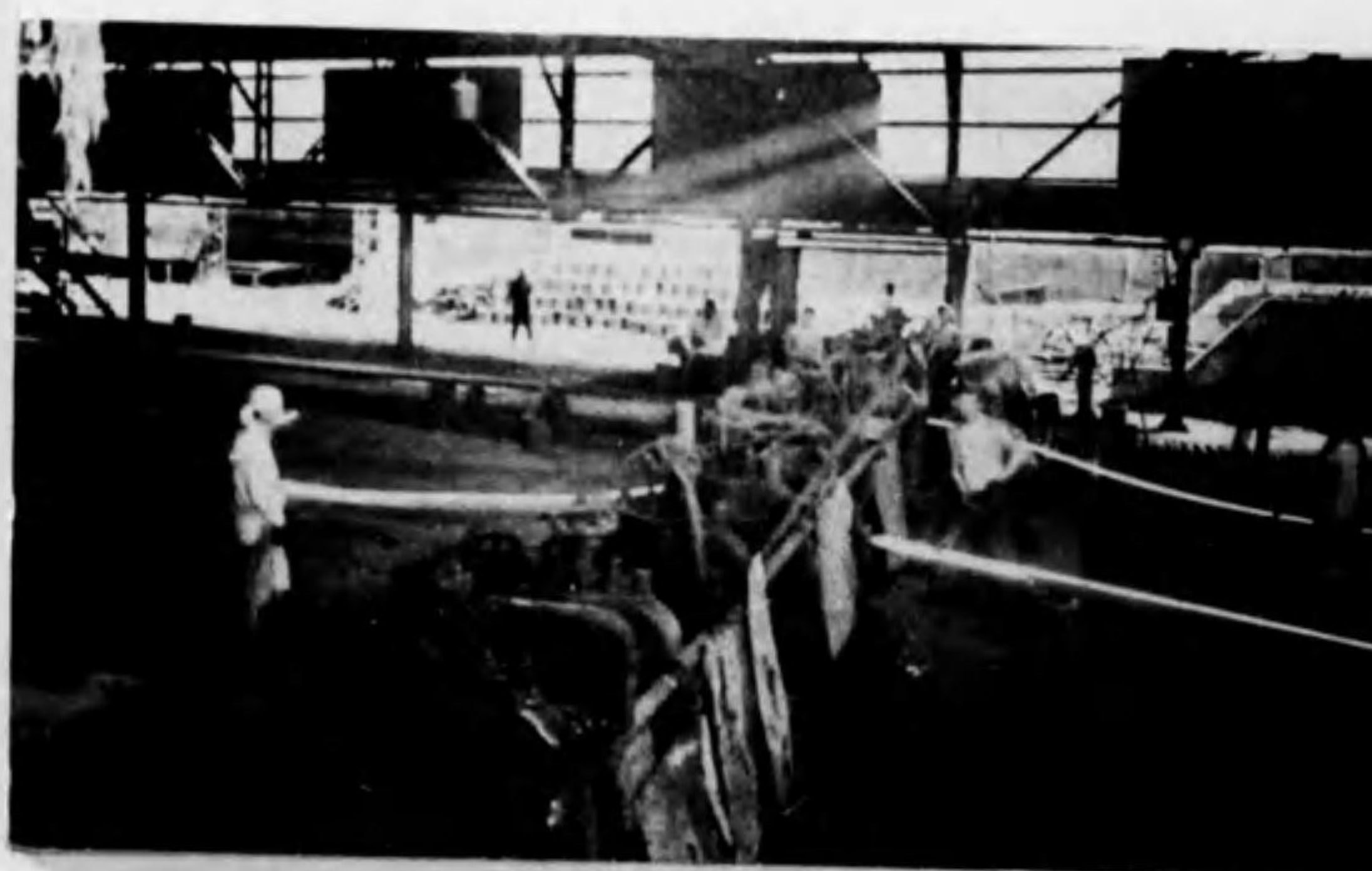
- 大形鋼壓延機 ○組
- 中形鋼壓延機 ○組
- 小形棒鋼壓延機 ○組
- 厚板壓延機 ○組
- 中板壓延機 ○組
- 薄板壓延機 ○組

一、研究設備

- 亜鉛鍍金機 ○組
- エルハルト式製管機 ○組
- 引抜製管機 ○組
- 水圧プレス ○基
- エヤーハンマー ○基
- スチームハンマー ○基
- 熱處理爐 ○基
- 物理試験室
- 化学試験室
- 高周波電気爐

一、營繕設備

- 機械修理工場
- 電気修理工場
- 鑄物工場
- 木工工場





(2) 製品

一、棒 鋼

何んと言つても需要の範圍を一番廣く持つて居るものは各種鋼材の内棒鋼である。その内でも丸鋼が其大部分を占めて居るが其製作寸法の種類は「直徑〇〇耗以上〇〇耗迄」の約一九種に及んで居り、其用途の重なるものは建築用、造船用、鑛用、鐵道車輛用、各種鋸材をはじめ自動車用材、シャフト材、ステーパー、ボルトナット、チェーンバー、肌焼用刃物用、機械構造用材等にして全く枚舉に遑のない位である。其納入先も各方面並に各會社に及んで

居る。

尙鑛山用鑿、機械工用具用鋼、自動車用鋼として特殊なる形状を要するものに六角、八角鋼があるが本社は之れも剩さず「對邊〇〇耗以上〇〇耗迄」のものを製作してゐる。

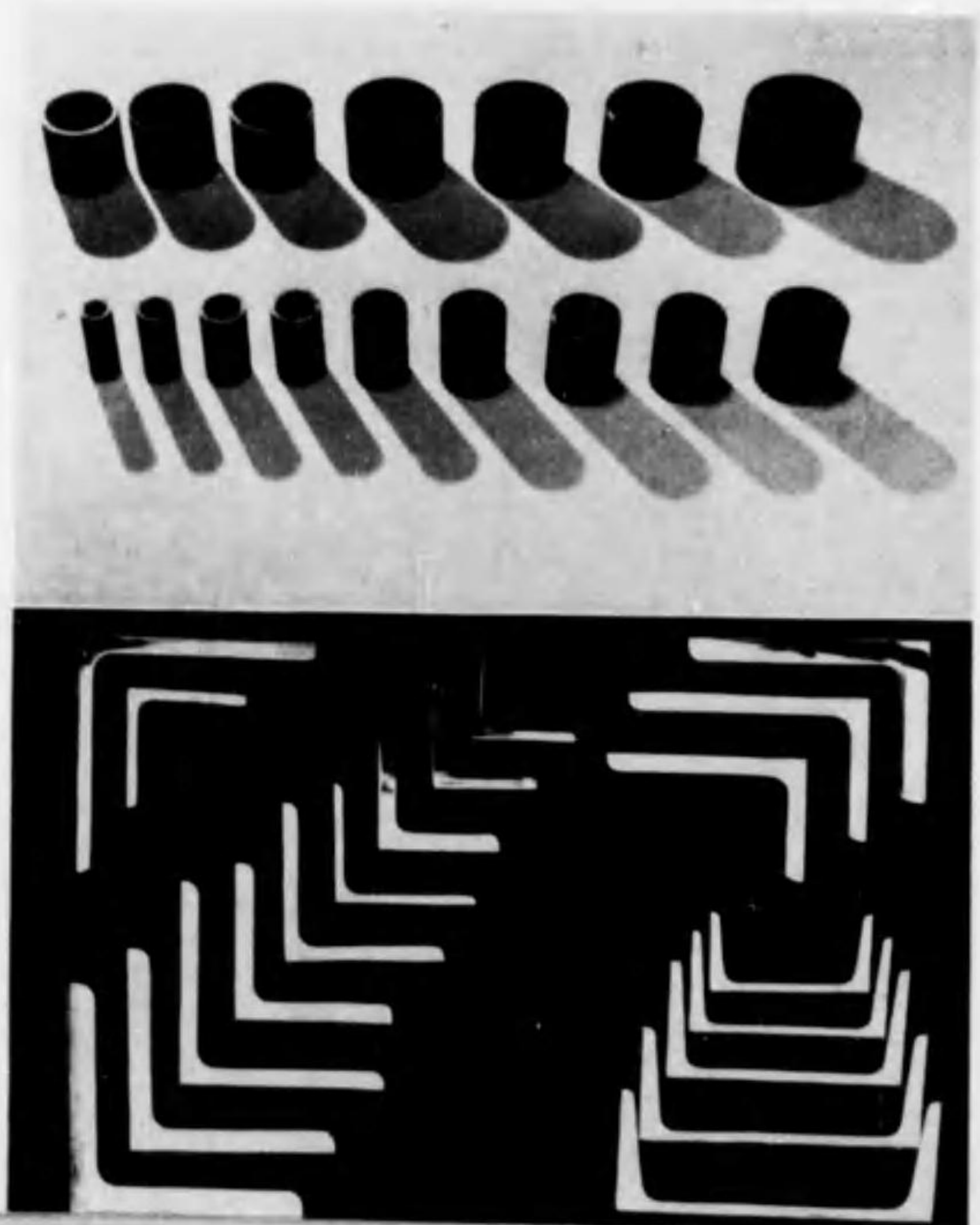
一、形 鋼

形鋼として製作する寸法の種類は中形等邊山形鋼「〇〇×〇〇

耗より〇〇〇耗×〇〇〇耗迄」約五種、不等邊山形鋼「〇〇×〇〇耗より〇〇×〇〇〇耗迄」約四種製作して居る外、全國でも日本製鐵、日本鋼管及當社の三社丈に製作可能なる大形鋼の内「〇〇〇耗及〇〇〇耗」等邊山形鋼並に「〇〇×〇〇〇耗及〇〇〇×〇〇〇耗」不等邊山形鋼をはじめ「〇〇〇×〇〇〇より〇〇〇×〇〇〇迄」の約六種の溝形鋼を製作す。其用途は建築用、橋梁用、車輛用、造船用であつて内地は勿論遠く滿洲、北支、南洋の各地に配給せられて吾等の使命の一端を果して呉れて居る。

一、鋼 板

厚板としては巾〇呎、厚み〇〇耗程度の重量にして〇〇〇〇迄の各種寸法を製作して居り、中板としては巾〇呎の各種、薄板としては〇十番迄の各種、要するに〇十番の極薄ものより〇〇耗の厚板迄一貫的に製作して居る譯である。之等の用途は建築用、ボイラー用、造船用、橋梁用が重なるものであつて、特殊な



ものとしては防盾鋼板、ステンレス鋼板、鋸材、各種工具ボールベアリング用リテーナー等にして薄板は亜鉛鍍金、浪板、ドラム罐等として各方面に供給せられて居る。

一、鋼 管

當社はエルハルト式製鋼管機を以て公稱「内徑○吋より○吋迄」繼目無の優秀なる瓦斯管を製作して居り、之の外「○吋より○吋迄」の各種冷間仕上引抜鋼管と熱間仕上鋼管とを製作して居る。其用途も瓦斯管、ボイラーチューブ、ステーターチューブ、コンダクトチューブ等にして石油、船舶、機械化學等の各部門に涉つて居る。特に目下各方面の支持を得てボールベアリング用レース材を本製管機により製作する事に成功し斯界に革期的貢獻を爲しつつあり。

一、鍛 造

エヤーハンマー、スチームハンマー、水壓プレス等の優秀なる機械を以て最高單重○○噸迄の製品を出して居り其範圍も形物シヤフト材、クランク軸シリンダー材等各種異形製品並に棒鋼を製作して居る。時局柄晝夜兼行にて全能力を舉げて操業を爲し居るも各方面の注文に應じ切れぬ状態である。

一、特殊鋼

當社の特殊鋼は炭素工具鋼、パネ鋼、クロム鋼、ニッケル鋼、ニッケルクロム鋼等にして前記ハンマー設備と相連關して各種の寸法ものを製作して居る。特にニッケルを要せざる鋼として、當社獨特の浪速鋼の製作あり、其性能はニッケルクロム鋼と全く遜色なき優秀製品を送り各般の方面より御好評を戴いて居る。

以上の如く當社製品の分野は多岐に亘り多様に別れてゐる。即ち當社は創業以來各般の新分野を開拓すべく力戦苦闘を続け大形工場建設の當時民間に於ては他にその例を見ず當社が率先事を創め新分野を開拓し、鋼管に於ても亦然りである。

斯くして前掲の通り當社製品は種目に於て鋼材に關する殆んど全品種に亘つて居り一社にして斯くも多種多様の製品に亘り而かも優秀な品質を誇り得るメーカーは本邦に於ては其の數極めて少いのであつて而かも今尙擴張に擴充を以てし愈々品質の向上と生産増加とに力めつゝある次第である。



七、福利・厚生施設

(1) 尼 鋼 乃 寮

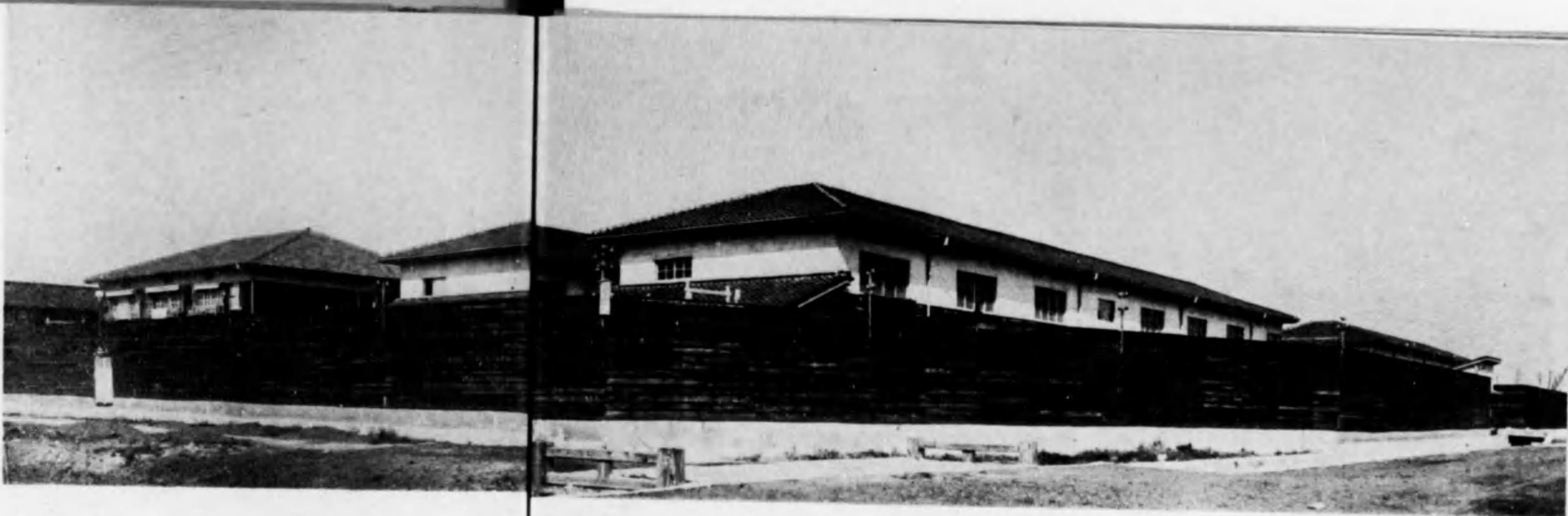
寮は獨身者の共同宿泊所であつて皇紀二千六百年奉祝記念事業を計畫するに當り其の第一着手として先づ獨身者の爲に安眠休息と修養、訓練の場所を提供し、同時に當地方で深刻である下宿難から免れしめむとした施設である、昭和十五年十二月七日を以て開設、今日に至つたが詳細は左の通り。

一、位置 尼崎市濱田崇徳院二五六番地

阪神國道濱田車庫に南接當社より省線立花驛に通する新幹線道路を傍らに、目下計畫中の崇徳院大公園を南に控へた好適の處に在る。

二、敷地

總面積約三〇〇〇坪、隣接地に比し平均一米以上の盛土を施し、周囲には新設溝梁を隔て、大巾道路を圍らし、構内には植樹、栽培、運動設備を施してある。



三、建物 延坪數一、七一〇坪餘、楠、橘、椿、櫻、梅の五種寮の外、事務所、食堂兼修養室、娛樂室、守衛所等である。

四、收容人員 定員を五〇〇名と定めてあるが、現在には青年社員二〇名、養成工一六〇名、一般工二五〇名の外不定時の勤勞報國隊員五〇名乃至八〇名を收容し、寮監三、守衛二、使丁四、賄夫一二名の職員雇員を置いて居る。

五、經費 創設費約五〇萬圓、經常費約一〇萬圓で寮生は原則として實費を負擔せしめ養成工、未経験工の如きは其の幾分を減免して居る。

(2) 尼 鋼 乃 里

里は勞務者の爲の住宅である、皇紀二千六百年奉祝記念事業の一つであつて、當地方に於ける極度の住宅難に對して我が社の中堅勞務者の爲に低廉なる住宅を提供し、集團居住の利便を與へむとする施設である、昭和十五年十二月七日一部竣成と共に貸與を





住宅地帯に在る。

開始し翌年二月末日を以て全部の工事を落成したもので詳細は左の通り。

- 一、位置 武庫郡鳴尾村小松字霞開六番地
- 東に武庫の清流を控へ阪神武庫川鐵橋下半丁の閑静な

二、敷地 總面積約三、三〇〇坪、周圍に側壁を圍らし、構内に植樹、運動設備、専用上下水道を施してある。

三、建物 延坪數約一、六〇〇坪、大、中、小の住宅一九四戸の外賣店、共同浴場、事務所等がある。

四、收容人員 百九拾四戸の内十數戸を除すの外常に滿員の狀況で百八拾世帯六〇〇名餘が特別隣保を結成して和氣萬々の

生活を營んで居る。

五、經費 創設費約四〇萬圓で經常費としては住宅管理、守衛、賣店員等數名の人件費年額約五、〇〇〇圓の外幾分の修繕維持費を要するのみだが年月と共に維持修繕費は増加する見込である。

住宅使用料は家の大小に應じて差はあるが極めて低廉な額を六種類に別けて徴收して居る

(3) 共 濟 部

社員、工員の全般に亘つて互助救済の機關として共濟部の設がある、各員は毎月當社より受くる俸給、賃金に應じて一定の標準額を納め、之れに據つて相互の慶弔、救済、金融を圖る機關であつて一人の禍福を多人數で分擔し合ふ爲の會であり職友が相倚り相援け合ふ仕組である、此の趣を賛して當社は金拾萬圓を交付し其の基本金たらしめ以て共濟部の基礎を強固ならしめたが同部は其の後堅實なる歩みを續けて居る。

八、關係會社工場

(1) 尼崎製鐵株式會社

當社は株式會社尼崎製鐵所と株式會社久保田鐵工所との折半出資の下に、兩社の所要銑鐵自給の目的を以て昭和十二年九月六日設立されたのである。

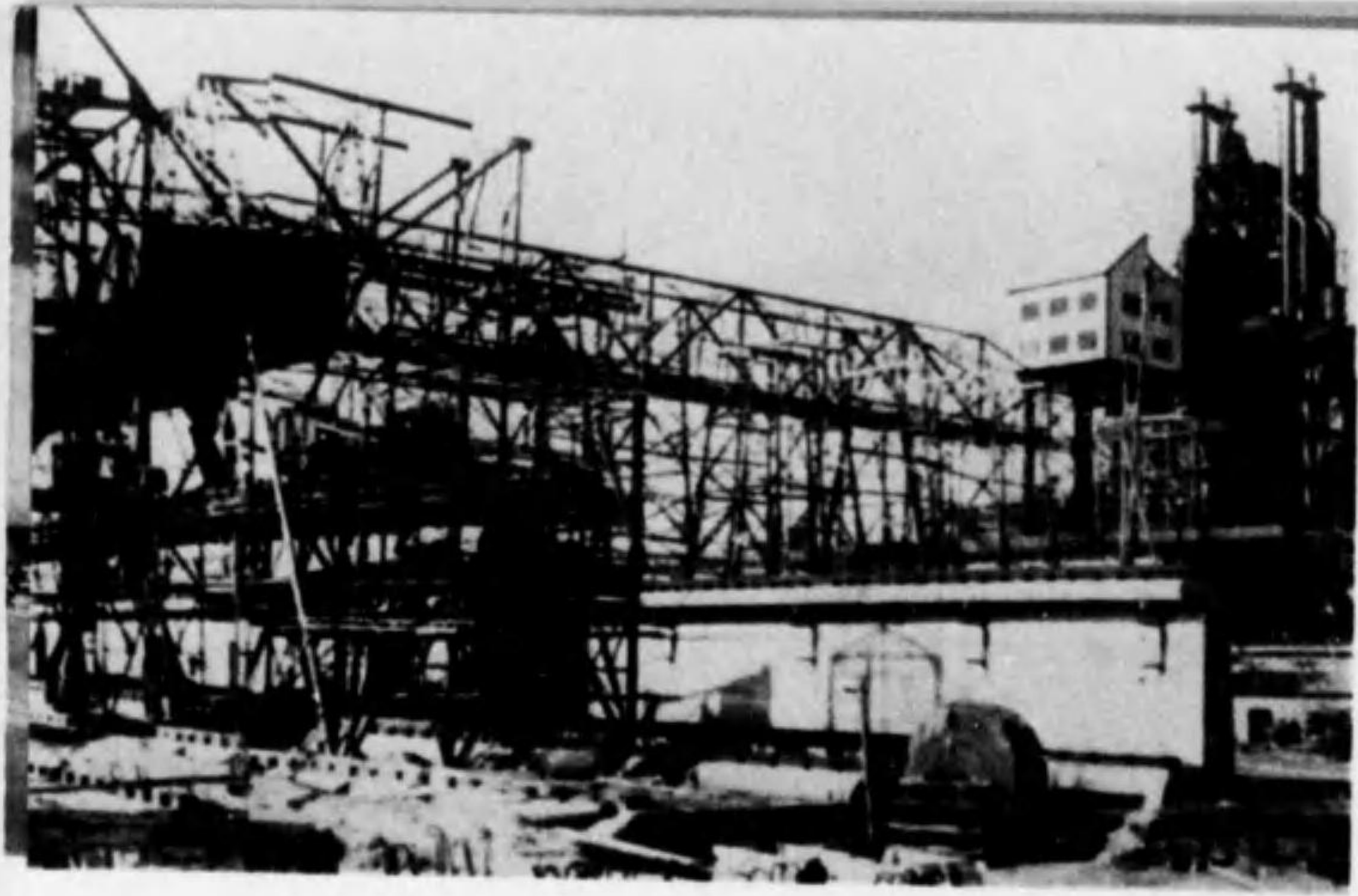
當初の計畫に於ては高爐のみを建設して骸炭は他より購入する豫定であつたが幸ひ石炭並に鑛石等の資源開發に力を注がれつゝある鐘淵實業株式會社との提携成るに及び骸炭をも自給する本格的規模に擴充したのである。

建設に當つては時局下種々なる支障を突破して、昭和十六年六月七日嚴肅なる不滅の火入式を舉行、爾來極めて順調に業務の進展を見て居る。

所在地 本社 大阪市北區堂島濱通り一丁目一番地(堂ビル)

工場 尼崎市又兵衛字喜左衛門新田三三二番地

出張所 東京市京橋區京橋三丁目四番地(塚本ビル)



資本金 參千九百萬圓

生産品目 ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○

役員

取締役社長	久保田權四郎
専務取締役	井上長太夫
常務取締役	川端駿吾
取締役	末兼要
取締役	城戸季吉
取締役	井上光次
取締役	吉田千東
取締役	筑紫三治
監査役	島田徳太郎
監査役	高木隆吉
監査役	久保田静一
相談役	津田信吾

(2) 株式會社 高尾鐵工所

明治貳拾年五月神戸加納町五丁目六十八番地に於て鐵工業を開始し、同三十四年九月同市葺合區吾妻通り現在の所に工場を移轉し機械其他を増設す。

大正六年七月五拾萬圓に増資し株式會社に組織を變更す。

昭和拾四年五月神戸市葺合區脇濱町三丁目に分工場を設置す。

同年六月、株式會社尼崎製鋼所の子會社として其の傘下に入れり。

同拾五年貳月資本金を〇〇萬圓に増資拂込完了同拾六年五月、加古郡平岡村に加古川分工場を設置す。

同拾六年壹月資本金を〇〇〇萬圓に増資拂込完了す。

神戸の高尾と云へば機械工作に於て著名にして、創業古く技術卓越高尾社長以下幹部の努力により財界幾多動搖變遷に遭遇しながら躍進的好成績を收め今日の基礎を作れり。

株式會社尼崎製鋼所の機械工作の一翼として同社の資本参加により資金關係も圓滑となり、支那事變、大東亞戰爭下に於ける今日生産擴充の爲に急なる現今同社の發展愈々見る可き者あり。

左に當社の營業科目と著名なる物を掲ぐ。

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

製鐵製鋼用諸機械及各種工作用機械

高級化學工業諸機械 人絹人綿紡毛用諸機械 汽罐及其他諸機械

一、社 名 株式會社高尾鐵工所

二、資本金 〇〇〇萬圓 (全額拂込)

三、所在地 神戸市葺合區吾妻通り三丁目三番地

役員

取締役社長	高尾猪之介
常務取締役	木村壽雄
取締役	淺野義夫
取締役	井上好三郎
取締役	平岡富治
監査役	井上長太夫
監査役	多田甚太郎





(3) 大阪シャリング株式会社

本社は大正九年五月大阪シャリング株式会社として百萬圓で創立せられ、爾來今日まで建物機械等に變動はあつたが同一箇所に於て鋼材切斷並に加工及其の賣買事業を經營し、鐵鋼界の消長及財界の變動に同社も其影響を受け變遷はあつたが、昭和七年には薄板工場を現在の尼崎市中濱に設け八年には中板工場を設置し拾年六月には薄板工場を増設する等、日本鐵鋼界に寄與し設備資金運轉資金にも増加を必然的に來し昭和九年には百五十萬圓に増資を行へり。

昭和拾壹年には事業の擴大と共に實質的にも形式的にも尼崎工場が根幹になりたる爲、本社を大阪市より尼崎市に移し昭和九年には大阪製鉄株式会社と改稱せり。

昭和拾年には貳百萬圓の増資をなし資本金五百萬圓となり、昭和拾四年拾貳月に至り大阪製鉄株式会社は株式会社尼崎製鋼所に合併せられたり。

尼崎製鋼所は製鋼工場にして本社のシャリング事業は日本第一種シャリング工業組合に屬し鐵鋼統制上配給業者として認められ

此の故を以て生産業者が同一會社内にて配給業を兼營することは統制機構の趣旨に背馳し運営上支障ありこの理を以て日本鋼材聯合會より之が經營分離を要望せられ商工省當局も此の見解を支持せり。

茲に於て昭和十五年六月尼崎製鋼所のシャリング工場を現状の儘分離することになり、舊名を復活し大阪シャリング株式会社を設立、現在に至る。

- 一、會社名 大阪シャリング株式会社
- 二、資本金 五十萬圓（全額拂込）
- 三、所在地 大阪市此花區北安治川通一丁目一番地

役員

専務取締役	竹内 宿 吉
取締役	千葉 金 三 郎
取締役	森下 彌 三 八
取締役	平岡 富 治
取締役	松嶋 清
監査役	井上 長 太 夫
監査役	北島 安 太 郎

(4) 大阪珪瑯株式會社

當社は大正七年四月二十二日和田珪瑯（明治二十三年創業）及大阪珪瑯合資會社を買收し資本金貳百萬圓（拂込金五拾萬圓）を以て大阪市浪速區稻荷町壹丁目に設立せり。和田工場は農商務省指定模範工場にして同省の貸下げ機械の設備あり。

大正五年取締役和田惣次郎氏は商工省より歐米の斯業視察の爲派遣せらる、當社は歐洲戰爭後の業界不況の影響を受け、之れに對處する爲資本金五拾萬圓（全額拂込）に減資せり。

大正拾壹年九月取締役石原廣氏斯業視察の爲大阪府廳囑託として朝鮮、滿洲、支那に旅行す、大正十二年五月現在の場所に移轉せり。

昭和五年一月に發生せる職工の勞働爭議は漸く七月に至り解決せるも、之が爲に營業期間に蒙れる損失は二十八萬圓に昇りたる爲十二月二十四日臨時株主總會を開催し商法第七十四條による報告をなし異議なく承認を受けたり。

其の後財界の不況、海外の輸出不振昭和九年の風水害等により營業上好ましからざる成績を殘せり。

昭和拾五年以降株式會社尼崎製鋼所の子會社として其の傘下に入り、同社の輸入シートパーにて壓延せる薄板を保税物として第三國向け輸出する等資本的に援助を受くることとなり、昭和拾五年十月壹日大阪稅關特殊保税工場の許可を受けたり。

昭和拾六年下期、業界の整備統合による殘存工場として十二月二十七日附商工省より指示せられたるを以て銳意業礎の堅實化に努めつゝあり。

- 一、社名 大阪珪瑯株式會社
- 二、資本金 五拾萬圓（全額拂込済）
- 三、所在地 大阪市西淀川區佃町二丁目一六五

役員

代表取締役	大谷 二雄
取締役	吉谷 武治
取締役	大井 平藏
監査役	井上 長太
監査役	井上 光次



追懷篇



十年を顧みて

取締役社長 井上長太夫

尼鋼創業以來茲に十周年を迎へ、其の足跡を顧みて幸ひ大過なく今日の盛況を見るに到つたのは洵に欣快とする所であつて、斯くの如く社運の隆昌を來たしたのは先輩各位の御芳情と所員一同の奮勵努力の賜であると、深く謝意を表する次第である。

昭和元年頃から同六年迄は第一次歐洲大戰當時の好況反動期とも申すべく、又關東大震災の復興一段落に依つて我が國の鐵鋼界は頗る不振の状態であり、海外よりのダンピングに怯へ、價格は不當に暴落し、銑鐵は噸貳拾圓、丸棒四拾八圓、鐵板の如きは一時參拾八圓（日鐵と鶴見との競合の爲）の取引すら行はれ、生産過剰の聲も大きく響いて實に慘憺たる市況であつた。

大正十五年私の關係して居た大阪シャイリング株式會社が財界パニックの飛沫を受けて金融難に陥り東京工場を分離せねばならぬこととなり、北島安太郎氏と共に淺野製鐵並に東京鐵間屋數軒に出資を求めて東京シャイリング株式會社を創立したのであるが、其れが因縁となつて、どうしても私が新會社の經營を引受けねばならぬ羽目となり、餘儀なく六年間は専務として其の衝に當つて居たのであるが、或日電力料金の更改に來た東電係員と折衝中「電力も負荷率九〇%にもなれば七、八厘で賣つても引合ふのであるが、三五%では壹錢五厘以上でない」と採算が取れませぬ」と云ふ話を耳にした。

當時工業界は極度の不振で電力の需要は減じ各電力會社に於ても餘剰電力の處置に窮して居る状態だったので、之れを熔解用の熱源に利用すれば負荷率は大いに高まるから料金も安くて引合ふのではあるまいかと云ふ考へが不圖頭に浮んだので、電氣爐の研究を始めた處、平爐の燃料たる石炭に比較して見ると

	鋼塊産當り使用料	單價	鋼塊産當り價格
平爐(石炭)	三 五〇	一〇圓〇〇〇	三四五〇〇
電氣爐(電氣)	六〇〇	〇圓〇〇六	三四六〇〇

(右の外電極代二〇キロ參圓)

右の様な比較となつたので電力を六厘で購入することが出来るならば略ぼ平爐製鋼費と均衡が取れるし、建設費は少額で済む、尙將來特殊鋼に向つて進み得るから電氣製鋼を企業しても充分成算が立つものとの確信を得るに到つたので、宇治川電氣の營業部長西村勇氏に相談して見た所、餘剰水力を棄て、居る状態だったので、大いに乘氣になつて智慧を副へて貰つたので、茲に愈々決心を固め、東京シャーリング株式會社を辭し、之れが創業に取掛つたのが我が尼鋼の産れる端緒となつたのである。

先づ淺野義夫氏の厚意に依り、工場敷地四千坪を借入れ、友人高村傳十郎氏、村上峯男氏、千葉金三郎氏、井上好三郎氏、島田徳太郎氏、多田甚太郎氏等の賛成を得て、資本金貳拾萬圓の株式會社尼崎製鋼所を創立する運びに漕ぎつけ、設備關係は東京シャーリング株式會社の工場長たりし平岡富治氏に一切を委ねて計畫を進め、電氣爐並に所要機械の全部は三菱商

事の好意的引受けに依つて牛尾製作所、戸畑鑄物株式會社に夫々發註、全部の準備を完了したのである、深刻なる財界の不況が幸して購入品の低廉取引の好條件となつたのに比し資金収集には不尠苦心を拂つた。當時〇此の電氣爐と云へば日本では最大のもので而かも〇基を一度に据付け、コンクリートバーを作ると云ふのだから、大變世人を驚かし、各方面から見學にも來られ、又反面には無謀な企てとして不安を持たれて居た様子でもあつた。

昭和七年三月二十八日、千葉氏の邸宅で創立總會を開き、五月四日端句の佳節に地鎮祭を舉行、同年十二月工場完成、作業開始を見るに到つたのであるが、政府の金輸出再禁止を轉機とする我が經濟界の好轉に加へ、滿洲事變の勃發に刺戟せられ、鋼材市場は頓に活況を呈し、幸先良きスタートを切つたのである。

十年一昔と云ふが當時尼築が漸く埋立工事に着手したばかりで春には村人が貝を漁り、秋には澤山の太公望が來て沙魚、鰯、鰯等を釣り上げて居た海濱が、又蘆の一面に生え茂つて居た泥地が僅か十年の間に我が國屈指

の躍進工業地帯となり、今日の如き股販を極めて居る現況を想ひ比べるに誠に感慨の深いものがある。現在の第一平爐の邊りは全く水の中で事務所
の邊りには白鷺が降り立つて餌を漁り海上には行き交ふ舟も美しく、遠く
紀淡海峽まで展望せられ、西北は六甲の連山を眺めて實に風光明媚な處で
あつた。

工場完成と共に平岡氏も東京シャリングを退いて力を副へて呉れるこ
ととなり、専ら作業方面に心を注がれ、千葉、村岡、大黒、千柄其の他の
若い社員を督勵しつゝ此の様な景色の好い處で活動する爽快さを樂しみに
朝は曉の霜を踏んで出で、夕は星を戴いて歸ると云ふ様な奮勵努力振りで
全く汗みごみになつて働いた。

其の甲斐あつて業績も頗る順調に進展したが、何分少額の資本で以て運
營せねばならぬので、計算の上では利益勘定であつても現金としては更に
残らない、所謂「勘定合つて錢足らず」で、決算期に於ける株主への配當
金も約束手形で決済するが如き状態で金融には人知れぬ苦勞を體驗した。
何しろ資本金僅かに貳拾萬圓で鐵骨の工場を建築し面かも

電氣爐○基（自働整機に貳五〇〇キロ變壓機貳基を備へたもの）

小形壓延機○基（主要電動機八〇〇馬力、三〇〇馬力）

其他作業に必要な附屬設備一切と水揚設備まで整へたのだから、運轉
資金は一厘もない有様で、少しでも豫定の生産が遅れると忽ち支拂に窮し
重役各位の經營して居られる店の協力を仰いで切り抜ける事が常例であつ
た。

曩に述べた通りの経緯であるから、電氣製鋼に就ての經驗があつた譯で
もなく、又特に勝れた技術者が居つたのでもなく、最初は牛尾製作所（電
氣爐メーカー）の東氏を指導者として、他は殆んど素人ばかりの工員を郷
里から集めて来て操業に掛かつたのだから中々思ふが如き製品は出来上ら
ない、壓延機に掛けると延びることは延びるが品質が一定しないので中に
は「ハードスチール」の様な固いものも混ると云ふ始末で、得意先からの
苦情が絶えない有様であつた。

其れでもどうやら鐵筋用の丸棒だけが出来る様になつたので、進んで特
殊鋼の分野に向つて進出すべく志したのであるが工場の技術が是に伴はな

い。研究の餘裕を與へれば可能な問題であつても月々の收支に追はれて居るから其れが許されないので、彼方此方で教はつた事さか、聞き囁つた事等を口移しに行つて鞭撻したり研究の資に供する位で何とかして相當な技術者を求めたものと奔走しても會社が貧弱な爲來て呉れる人がない。仕方なく日鐵の特殊鋼課に頼んで實習をさせて貰つたり、指導者の派遣方を乞ふ程度で、凡ゆる苦心を重ねて見たが、技術の向上は遅々として進まないであつた。

幾ら素質の良い技術者であり、優良な工員であつても、其れを錬磨して呉れる指導者を得なければ向上は望めないもので、優秀な指導者が得られない事が私の最も惱まされた問題で、又従業員に對して氣の毒でもあり、不憫でならなかつたのである。

現下の特殊鋼界は時局に刺戟せられ、需要は急激に増大し、劃期的な發展過程にあり、技術も亦著しい進歩を示して居るが、十年前は需要も少なく、優良な舶來品に壓倒されてメーカーも日鐵を除いては僅かに數指を屈するに過ぎず又其の生産量も僅少で、誠に不振の状態であつた。

加ふるに問屋が舶來品崇拜で鑿岩機、又物、工具用の炭素鋼に至る迄總べてが輸入品に依存して居る有様で、駆け出しの尼鋼が特殊鋼の製造を始めるなどは「身の程知らず」の嫌があつたが、私は斯業の將來性を考察し萬難を排して之れを進めるべく努力したのである。多少の犠牲は素より覺悟の上で色々の試作を命じ、研究を重ねさせたけれども、註文が少ない爲に連続して作業を行ふ事が出来ず、折角「幾分慣れて、しめたなあ」と思つても、又普通鋼に逆戻りせねばならぬ様な事で容易に成果が上らない。其の内に電力料金の更改期が來て從來八厘のものが壹錢貳厘に引き上げらるゝ事になつたので、普通鋼を造つて居たのでは採算が香ばしくないので越當り電力消費量を五〇〇キロに、又カーボンの使用量を十キロに引下げないと算盤が持てないので工場に向つて無理な要求を出して研究せしめたが之れも結果は面白くない。

斯様な状態で推移すると、事業の繼續困難に陥る怖れが有ると考へたので、特殊鋼の研究は後日に譲り、積極的に普通鋼に轉出すべく方針を定め平爐二基と中大形工場（大形の内小さいサイズを延ばし得るもの）を増設

したのである。

建設資金は増資に依ることにしたが、市場性のない株式である爲、株主諸彦の懐具合も考慮に入れ、引受希望のあつた小倉製鋼所並に井上光次氏兩者へ小額のプレミアム附で幾分かの新株式を割當て、増資を完了したのである。

斯くする内に資本金も百五拾萬圓となり稍や製鋼業としての形態を備へるに到り、昭和九年八月平爐火入式を舉行、中、大形工場も試運轉開始の運びに到つたのであるが、折柄同年九月二十一日關西一圓を襲つた未曾有の暴風雨の海嘯で全工場は一米以上の浸水で、慘憺たる被害を受けたのである。

此の時ばかりは少しがつかりしたが、勇を鼓して所員一同と共に不眠不休で復舊に努め、約二ヶ月後に運轉を再開することが出来て、此の災難を切り抜け得たのである。

當時大形製品は日鐵の獨占分野であつたので随分氣苦勞が多かつたが幸ひ問屋有力者の協力もあつて、業績は順調な進展を辿り、社の基礎も漸く

安定の域に入つたのである。

昭和十一年、製鋼技師山田貞雄君が「ホローインゴット」よりするパイプの製作を研究中、小田切延壽氏の懇意も有つて鋼管製造に着手することに決定し、資金調達爲、末兼要氏の斡旋で、久保田權四郎氏の贊助を得ることとなり、資本金を參百萬圓に増資の上、所要機械は三菱を経て獨逸デマーク社へ發註すると共に機械の見聞旁々歐米視察の爲、外遊したが、私は歐米鐵鋼界の盛況を親しく見聞するに及んで彼我の懸隔の甚だしいのに驚くと共に、層鐵製鋼法より脱却し、鑛石からの一貫作業に向つて企業を高度化せねばならぬと心秘かに決意したのである。

歸朝後間もなく世界的に原料不足が顯著となり、又歐洲方面よりの買付が多量に上るとの理由に依り、米國スクラップの値段は入電毎に昇騰の報を告げ、鋼材界は頗る活氣を帯び相場は奔騰して、僅々二、三ヶ月の間に虻參拾圓以上の暴騰を示し、自然本社の業績も其の惠澤に浴する事が甚大であつた。

斯くして第一次歐洲大戰後の反動とも云ふべき永年に亘る鐵鋼界の萎靡

不振も、世界的に一陽來復愈々好調なる景氣上昇期に入つたから、鋼管工場
の材料自給に併せて平爐○基の増設に着手、資本金を七百五十萬圓に増
額することに決定し、本社の株式を始めて市場に公開したのであるが、環
境の良化と相俟つて、一時株價は百貳拾圓を唱へ、時運に依り積年の力闘
に花が咲き、株主諸彦に對しても報ゆる事が出来たのである。

昭和十二年七月七日、日支事變が勃發し、戰果の擴大するに従つて鐵鋼
界は異常なる盛況を見るに至つたが、恰も好し新鋭なる鋼管工場、平爐擴
張工事の完成するあり、本社事業に一段の光彩を添へるに至り、社運の隆
昌と共に業績は飛躍的な好調を辿り、愈々強靱を加へたるを以つて、爾後
の収益を以つて豫ての念願たる熔鑄爐の建設に乗出すべく久保田權四郎氏
と相謀り、資本金五百萬圓折半出資の尼崎製鐵株式會社を創立、十三年七
月地鎮祭を舉行、工事に着手したのである。

最初は日本化成と提携、コークスは同社より供給を受ける計畫の下に高
爐だけを設備する考へであつたが、偶々鐘淵實業の参加を得るに至り、炭
炭の自給をも計ることに變更したのである。

十三年十二月隣接せる大阪製鐵株式會社（前身大阪シャーリング株式會
社）専務の畏友、鶴間正祐氏の不幸早世せられたるに依り、兩社の合併談
進行、同社々長北島安太郎氏との間に假契約を締結、翌十四日十二月一日
を以て合併完了、本社資本金を壹千貳百萬圓に増資、業務上は薄鉄、厚鉄
部門を加へることになつたのである。

十四年明治時代からの歴史を有する神戸高尾鐵工所が所主老齡の故を以
て、同所の經營讓渡の交渉を受け、懇望もだし難く、之れを買収して機械
工業に手を染めるに至り、更に大阪法那株式會社の窮狀に在つたのを同社
株式の過半数を手に入れて之に力を副へ、本社薄鉄發生品の處理を有益な
らしめる事としたが、幸ひ兩社とも爾來順調な發展を辿りつゝある。

我が社創業以來の懸案たる特殊鋼の製造に就ては顧問としての指導を托
せる蒔田工學博士の部長就任以來面目を一新して技術の向上進歩に見るべ
きものあり、製品の優良化は勿論、時局に呼應し、研究部の充實を企圖し
多年研究を重ねた新鋼の發明に成功して軍部よりの特命を拜するに至り、
漸くにして所期の目的を達成するの域に入つたのは實に欣幸とする所で、

十年前僅かに資本金貳拾萬圓を以て設立した渺たる尼鋼も今日に於ては

一、資本金	〇〇〇萬圓
一、積立金	約壹千萬圓
一、従業員	約〇〇〇〇名
一、生産高	約年〇〇〇〇〇〇〇〇
一、賣上高	約年〇〇〇萬圓
一、投資會社	(1) 尼崎製鐵株式會社 (2) 株式會社高尾鐵工所 (3) 大阪シャーリング株式會社 (4) 大阪瑠珈株式會社

右に示すが如き強固なる社礎と堅實なる陣容とを備へ、業界に於ける地位も亦重きを加へ來たり世紀の偉業を完遂すべき國家最大有事の秋、時局産業の一翼として大政を翼賛し奉り、天恩の萬分の一に酬ゆるを得るは、我等の榮光之に過ぎたるはなく感謝の日常を職域奉公に精進し得ること、なつたのである。

十年の社史を回顧し、短期間ではあるが吾等が心身の全精魂を傾注して合作成れる尼鋼が指導塔高く掲げた「強く、正しく、睦しく」のモットーの下に協力一致逞しくも又雄々しく鐵鋼報國に邁進する現状を想ふとき私かに會心の笑を禁じ得ないのである。

茲に想出の一端を述べて創業十周年追懐の辭とする。(二七、四、二〇)

尼鋼の今昔と 尼鋼精神

常務取締役 平岡 富治

「十年一昔」と云つて、十年経つと何かと容相が變つて來るとしたものが、尼鋼も生れて茲に滿十年、入江の一角に洲のやうに埋立てられた砂地——二、三千坪もあつたか知ら——に舊大阪製鉄に隣して電氣爐工場と小形棒鋼壓延工場とを建設した當時を顧みると「全く變つたよ、中濱の景色も……」と自分ながら驚く程尼鋼自體も變つたし、其の附近も變つた。感慨無量と云ふ言葉は恚ういつた場合に一番よく當嵌まるやうだ。

尼鋼が創立された當時は、私は東京シャリングで新工場を建設して居た爲に、東京と尼崎と月半分宛の掛持で、文字通りの東奔西走と云つた有様で、愈々工場完成の近づいた頃には、芦屋住ひの井上社長と寶塚温泉に仮

寓して居た私と早朝六時半から七時までの出勤競争までやつたりして造り上げた初期の尼鋼時代から、苦難期や好調期などの幾星霜、幾變遷を経て「三年経つたら」「五年経つたら」と、ひた向に頑張つて居る内に、夢の内に十年を経過して、何時の間にか相當なものに成つて居る尼鋼を見出したとき、自分と云ふ男も又何時の間にか十歳も歳をこつて、頭の毛が極めて淋しくなつて居ることに気がついて、今更のやうに二度びつくり「苦笑の歡喜」と云つた心境——これが今日の尼鋼に對する私の氣持である。

井上社長の明晰と度胸の塊である所の、民間最大を誇つた○電氣爐○基に小形棒鋼壓延設備を配した尼鋼が生れた當時の世情は、全く不況のドシ底に呻吟してゐる時で、業界では兎角の批評等もあつたと聞くが、斯うした不況時に生れた工場が難ては大を成すんだと云ふ信念の下に、極力井上社長に協力する覺悟を決めて關西下りをした私としては、勿論尼鋼の今日あることを祈念し信じて居たもの、然し何しろうまく行つたものだ。

否、此の現實は正義に立脚した努力に對しては必ず酬ひがあると云ふ宇宙の理法を如實に立證示現されたまでのこと、蓋し井上社長を主腦とする尼鋼人○千の正々の陣堂々の戦が今日の勝利を獲得したものなのである。斯

うした意味に於て、特に此の機會に披露し度いことは、尼鋼をして今日の内容的健康を保持し、外觀的成長を増強せしめた大きな要素は、全尼鋼人の「尼鋼式日本精神の發露」であること云ふことだ。「一貫規律」「垂範統制」「相互信賴」「一心協力」「完全努力」「勞資協調」「福祉均霑」と云つた會社の指導精神が創業以來の尼鋼精神たる社是で、戰爭勃發に依つて刺戟され、喚起された寢ぼけづらの日本精神でなく、十年前から生れつきの此の尼鋼精神の發露に徹するの意氣、經營の面にしても作業の部にしても何事にもあれ報償は後にして「先づやるんだ」と云ふ觀念を先にしての大乗的所爲、其れが即ち全尼鋼人の「尼鋼式日本精神の發露」なのであつて、眞の有魂的日本の企業道の基根を爲すものであり、尼鋼の生命であり身上であること信じてゐる。

創業十周年「なんだ漸く十年か、若い若い」と云はれて見ると全く若い、産業尼鋼人は社長以下皆若い。前途は洋々、大東亞新秩序建設完成までには實に幾多の發展的苦難が発生するものと覺悟して、一同畢生の努力を傾注しなければならぬと思ふ。

敢て一拙文を掲げ、尼鋼創業十周年の記念としたい。

追 懷

取締役 井上好三郎

時恰も昭和七年春現社長井上長太夫氏の發意に依り小規模乍ら電氣爐に依る製鋼所を尼崎築港埋立地に創設するの議に賛したが當時我が國財界の不況、鐵鋼界の不振は今日より顧みれば丸で嘘の様な眞で鐵鋼價格もベース物で越五拾圓から五拾四、五圓の市價で銑鐵の如きは貳拾圓臺でありました。従つて工場建設の鐵骨電氣爐其他諸機械等の如き極めて廉價でしたと云ふのも各製造家は其の日の其の日の工場に於ける仕事繼ぎに汲々たる有様で受註には總べて懇願すること云つた風に聞き及びました。井上社長と東京で會見の際其機械製造會社の外交員は「お値段の點は兎角として何卒々々註文だけは弊社に」と懇願した事例がありました。左様の仕末で我が社は全部が新設であつたにも拘らず工場の建築諸機械の据付等は案外

廉價に且つ豫定の期日に極めて順調に出来上りました。

第一期工事建築の地鎮祭に參列した時の如きは現在平爐工場の邊りは未だ小波立つ水面でした。其の後同地方の急激なる發展に伴ひ此の邊りは本社の南方一軒以上にも及ぶ地域は各種重工業會社や共同火力發電所等で餘地を残さぬ有様となり現今では我が國有数の工場地帯の一つとなりました。是につけても當地方の重要性を先見せられ尼崎築港埋立に着手せられた、淺野總一郎翁の慧眼と識見とは今更乍ら畏敬の外はなく、淺野事業王が常に國家的見地から事業を起されたことに滿腔の敬意を禁じ得ないのであります。

本社は創業の翌年より増資に増資を以てし、此の間大阪製鉄株式會社を合併し今日では我が國製鋼業界で其の産額に於て五指を屈するに足らぬのは自他共に認むる所であります。創設十年にして斯くも急激なる發展進歩を遂げたことは誠に御同慶の至りて爲邦家慶祝に堪へない所であります。時恰も大東亞戦争の時に際會し鐵鋼産業の點に於て當社の國家的使命は重

く且つ大であります。其の生産は直接間接の別なく現に我が國銃後産業陣の最重要部門であります。此の秋此の業務に従事せらるる尼鋼人の榮譽と責任とは洵に大なりと云はなければなりません。

大東亞共榮圈建設の眞只中に於て尼鋼はたゞへ一甕の鋼材でもより多くを國家の爲に提供しなければなりません。宜ろしく従業員一同は此の點を自覺せられて一社一心の精神に則り和衷協力、粉骨碎身其の使命遂行に突進せられ職域奉公に邁進し以て國運の隆昌に寄與せられむことを祈つて止まぬ次第であります。

十年の回顧

取締役 千葉金三郎

株式會社尼崎製鋼所が茲に創立十周年を迎へ、記念誌を發刊せらるゝに際して、何か感想でも投稿せよとの事でありますから、創業以來飛躍的な發展の途上に在る十年間の感想を述べて、私の責を塞ぎたいと存じます。

丁度十年前平和俱樂部に於て井上社長と私が會見致しました際「吾々の販賣する鐵鋼を吾々の手で製造して、それを販賣する方法を考究しては如何か、現在は製造設備も電力も共に比較的廉價だから引合はぬ事はあるまい。譬へ小規模でも電氣爐に依つて鋼塊を造り壓延する事にして、先づ資本金貳拾萬圓程度で始めやうではないか、都合によつては貴下の經營して居る伸鐵工場を一緒にしても良いではないかとの相談を受けました。

私も常々からメーカーを持たない問屋業は好況時代には總てを製造家の専横に委さねばならないし又不況の際には製品を押し付けられるし、何れ

にしても問屋は苦しい立場に立たねばならぬので、この弊から逃れる爲には製造と販賣とをやるのが理想であると考え居たので井上社長の此計畫に賛意を表した次第であります。

そこで社長も種々研究の結果愈々始めやうと決意せられ、準備を進められて淺野小倉製鋼所の末兼氏等の御指導の許に尼崎築港の埋立地を卜して工事建築に着手せられたのであります。當時の敷地は埋立早々の事とて處々に水溜があり近邊には工場會社とてはなく連も淋しい處でした。

當初は資本金貳拾萬圓の株式會社尼崎製鋼所を創設し、僅かに電氣爐に依り鋼塊を造り丸鋼に壓延の上之を市場へ賣り出す程度で生産高も誠に微々たるものではありましたが、其れでも「吾々の賣る丸鋼の中には吾々の工場で製造したものもある」このプライドを感ずることが出来ました。

昭和七年下半年から鐵鋼界が好調に向つて來ましたので慧眼達識なる井上社長は更に増資を斷行して工場を擴張し、大形鋼の製造に着手せられたのであります。其の後總べて順調に推移し、増資に次ぐ増資を以てし、一面には鋼管工場及びプレス工場を新設し、又其の間大阪製鐵株式會社を合併して中小形棒鋼、大中形鋼、中厚板及び薄板に至るまで一切の製造が出

來る關西屈指のメーカーとなり、他面には銑鐵獲得の爲に尼崎製鐵株式會社を久保田鐵工所と共に創立し、我が社の資本金も十年間に九拾倍の千八百萬圓となつた譯であります。

此の間井上社長、平岡常務等の苦心と努力とは並大抵のものではありませんでした。尼鋼の斯くの如き發展は兩氏が晝夜寢食を忘れて社務に盡瘁せられた賜であるご私共は常に恒に敬意を表し、其の十年一日の如き御精勵に對しては感謝措く所を知らぬ所であります。

決戦下の我が國民は一億一心、大東亞共榮圈の確立に總力を擧げて戦争目的の達成に邁進して居る秋であります。私も最初より重役の末席を汚して今日に至り不肖乍ら本社の發展に協力して参りましたが、今後老骨を捧げて國家の爲及ばず乍ら最後まで御奉公を致さむものと固く決心して居る次第であります。

終りに臨み斯くも社運隆々たる本社に従業せらるゝ職員工員の方々も此の決戦態勢下に於ける我が國の使命と製鐵業界に於ける本社の地位とを十分認識せられまして、今こそ職域奉公の赤誠を十二分に發揮せられ以て大政を翼賛し奉るの決意を新にせられむことを此の機會に切に祈つて止まぬ次第で御座います。

所 懐

取締役 久保田權四郎

尼崎製鋼所が本年を以て創業滿十周年を迎へられますことは大東亞戦争に於ける皇軍赫赫たる大戦果の下、東亞共榮圈の偉業を遂行せられつゝある秋、洵に意義一入深いものがあり衷心慶賀に堪へない次第であります。

世俗に十年一昔と申します此の十年の歲月は悠久なる時の流れに比ぶれば短いものであります。人間社會殊に我々工業界に於ては必ずしも短い坦々たるものではありません。

顧みて創立された昭和七年を想起致しますと我が國を繞る國際情勢は混沌たるもので須臾も豫斷を許さぬ非常國難の秋でありました。滿洲事變に次ぐに日支事變續いて歐洲戦争の勃發から今次大東亞戦争に展開致し世界は動亂の巷と化してゐるのであります。従來の觀念を一擲して國家總力戦

の新體制確立に經濟界も亦急轉廻之れが建直しに波瀾を極めてゐると云ふ情勢であります。其間創業後の試練時代に克く對處せられ孜孜として業務の改善、技術の研究に盡瘁せられ難局と戦ひ時代を回想して「興隆の蔭に涙あり」の感を深くし乍ら一貫作業と自給自足を目標に工場擴張と生産増強に努め諸工業の基礎的資材の製作に専念し業績漸次上り當初資本金二十萬圓より逐次千八百萬圓に増大せられ、然かも内容極めて充實せる我が國有数の製鋼會社として今日の隆盛なる社礎を招來せられ産業界に幾多の功績を上げられてゐるのであります。

去り乍ら今日あらしめたるは決して偶然に非らず、此の間實に井上社長の不抜の信念と、多年の豊富なる經驗と、堅實なる經營方針とにより又一方には平岡常務の優秀なる技術を以て惡條件を排除し他面幹部、社員、工員御一同の容易ならざる御努力による所謂工業報國精神の發露に外ならぬのであります。深く敬意を表すものであります。

今や皇軍の赫々たる大戦果により東亞共榮圈の偉業は着々進捗致して居ります。然し乍ら戦は是れからであり今後の長期戦に備へ皇軍の大戦捷に應へ至難なる今後の經濟建設工作に、我が産業陣も亦鐵石の心を固め現下

焦眉の問題たる生産擴充に邁進致さなければなりません。此の時此の際意義深い十周年を祝し之れを記念せられ爾今一層の御活躍を決意せられますことは國家の爲め衷心御歡び申上る次第であります。

自分は先年當社に役員として末席を汚して居る一人であります。が當社、久保田鐵工所及尼崎製鐵株式會社の三位一体的なる連繫の下、工業を通して國家社會の御役に一路邁進出來ますことは洵に欣快に堪えない所であります。

終りに社長以下従業員各位の御健康と超人的熱意と氣魄とを以て我が工業の發展のため又時局下國策の命する所に邁進せられ將來五昔十昔の記念の回を度重ねられることを期して疑はざるご共に愈々「尼鋼」の偉名を永く輝かされ一層の御盛運を祈念して已みません。茲に所懐の一端を述べて讃仰の辭を呈する次第であります。

尼鋼十年史

非賣品

昭和十七年五月卅日印刷
昭和十七年六月四日發行

株式會社尼崎製鋼所內

編輯兼 發行人 千葉雄二

尼崎市 中瀬新田

發行所 株式會社尼崎製鋼所

印刷者 龍口巳之輔

大阪市浪速區元町三丁目

寫真構成 山本三郎

大阪市西區靱南通三丁目



終